

～ハイスクールD×Dに  
転生したらしい～ 特  
典は『市丸ギン』…っ  
てはあ!?

四木シロ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

簡単に言うと、ハイスクールD×Dの世界に市丸ギンの容姿、能力を持って転生させてみた!といった作品です。処女作なため、色々拙いと思いますますがよろしく願います。

く本編あらすじく

突然死んでしまった主人公はあの世でテンプレよろしく転生の道を選ぶが、行先は『ハイスクールD×D』の世界だった。そしてまたテンプレよろしく特典をもらう主人公だったが、その特典というのが『市丸ギン』……っではあ!?!?!

# 目次

|                    |     |
|--------------------|-----|
| 転生後のプロローグ          |     |
| プロローグ              | 1   |
| 転生後のプロローグその1       | 5   |
| 転生後のプロローグその2       | 10  |
| 転生後のプロローグその3       | 32  |
| 転生後の原作紹介           | 51  |
| 旧校舎のディアボロス         |     |
| 読むのと実際に見るのじゃ衝撃が違う  |     |
| なあ                 | 76  |
| なんや忙しないなあ、知つとる？これ  |     |
| 一日の出来事やで？          | 101 |
| 結構重めのCO（カミングアウト）のは |     |

ずなんやけどちよつと軽すぎひん？

128

初！はぐれ悪魔!! with 悪魔講義

!!って油断したらあかんよ？

156

なかなかヘタレ発言やったと思うんや

けど？

185



# 転生後のプロローグ

## プロローグ

side???

俺は死んだ。

死んだことにさえ気づかずに死んだ……らしい。

なぜこんな曖昧な表現かというと、

『貴方は死にました。あなたには二つの選択肢があります。

①記憶を消去し、輪廻の輪に還る道。

②記憶を持ったまま、別のどこかの世界に転生する道。

2つ目の道を選ぶ場合には特典がランダムで与えられます。

転生先についてもランダムに決められます。ご自由にお選びください。

何かご不明な点があれば備え付けの電話から以下の番号にお問い合わせください。

お問い合わせ先 0120-〇〇〇-XXXXX』

自分が死んだという旨が書かれた書置きと備え付けの固定電話、そして周りを見渡せ

ば異常とも 取れるほど真っ白な部屋にドアが二つ…。

①と②の看板が掛けられているところからして、あのドアの先がそれぞれの道なのだろう。

「どう見ても神様テンプレ転生だよなあ…」

(というか、あの世ってフリーダイヤルなのか?)

ーこのあと滅茶苦茶お問い合わせしたー

取り合えず現状分かったこと、

1、自分は列車事故に巻き込まれたこと

2、自分の家族がちゃんと自分の死を乗り越えたこと。

3、輪廻の輪に還る、というのは今までの記憶をすべて消し、同じ世界に生まれなおすこと

(稀に消すのに失敗するらしいが)

4、大量の死者が出たため、あの世はその対応に追われていること

5、上司がバックレやがったふざけんな

以上だ。後半愚痴じゃねえか。

うーん、死ぬ前の世界にそこまで愛着もないしなあ、②でいいか!

そう思いつつ現状の非現実感にワクワクしながら、②のドアに手をかけた。

そして、ドアを開けた先には……

『転生先』、『特典』と書かれた箱があり、上に丸い穴が開いていた。

……うん、雑ウ!!!

何このアナログ！もう少し近代的でいいじゃん！ファンタジーでいいじゃん！  
空中に投影される感じでもいいじゃん！俺の少し前までの期待感返してよお!!  
はあく（ため息）、まあいいや早速引いていこうかね。

ゴソゴソ……ツス

「転生先は……『ハイスクールD×D』か、確か二次創作小説で読んだぞ。パワーインフレがすごいんだっけか？」

ま、一般人が過ごすにはそこまで危険性もねえでしょ。」

ピロリロリーン！ ツス！

何か立った気がするが気のせいだ。気のせいだろう。気のせいだよね？（震え声）  
さて、気を取り直してお次の特典はつと、

ゴソゴソ……ツス

「えーっつと、なになに？……『市丸ギン』ってのはあ?!?!?」

ところでだが、皆様はBLEACHなるマンガをご存じだろうか？アニメでもいいぞ？

『市丸ギン』というのはその中に出てくるキャラクターの中の一人でもなかなかの人気キャラなのである。詳細はネタバレの恐れがあるから言わないよ？

と、まああまりのネームバリユーに俺は動転してしまった。そう、してしまったのだ。俺は動転してしまったあまり、自分の、周りの変化を見落としてしまっていたのだ。そう、足元にぼつかりと穴が開いているという変化を

「こんなところまでテンプレかよおおおおお!!!」  
『俺』は『ボク』市丸ギンになった。



# 転生後のプロローグその1

俺市丸ギンがボクになってから5年が経った。

え？急展開すぎやあって？しやーないやん、誰もボクが赤ちゃん時の話なんて興味ないやろし、

何よりボクが思い出したくないんや。なんで意識はつきりしたまんま授乳を受けなあかんの。今生で死んだら絶対にあの世に文句言わなあかん。

まあ、こうして転生できたわけなんやけど、あの世での通りならここは『ハイスクールD×D』の世界なんやろうけど、今のところこういった問題はないなあ。

そう、この『世界』は問題ないんよ。問題は貰えた特典のほうなんよなあ。今のボクの容姿はまんま、幼少期の市丸ギンになってる。

いや…まんま!?特典として斬魄刀だけ、とか能力系か思うたら容姿なん!?あの世への文句が一つ増えたみたいやなあ…

さらには、ここまでの話から分かるかわからんけど、口調が京都弁になってる。市丸ギンの肉体に引つ張られるみたいやね。

(作者は京都弁を話さないののでできるだけ再現?しようと思いますが、おかしい点はあ

ると思います。by作者)

そんなこんなで転生したボクは今何をしているのかというところ……

『君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ』破道の三十一！赤火砲!!」

ボカ——ン!!

適当な山中で鬼道を試しています。だってここハイスクールD×Dの世界やで？何かしらの自衛策は欲しいやん？ちなみに、実験の結果は……

「ゲッホー！ゲホゲホ!!ゲッツッホ!!」

っの、能力系……付けてくれてたみたいやね。あの世の運営の皆様、文句言うてすんませんでした。」

……結果は成功ととっていいか失敗ととっていいかはわからんけど鬼道は使えた……暴発はしたが。とりあえず、能力系は使えるみたいや。あとは瞬歩と斬魄刀かな？

白打（はくだ）は体術やからどうとでもなるやろうし。

「……………瞬歩ってどうやるんや？」

あれって霊体やないと出来ひんのちゃうかったけ？今のボクは受肉をしている状態なわけで、

「あれ？つちゆうことは今のところは瞬歩……無理？」

ま、まあ？瞬歩出来ひんと死ぬ…ちゆうわけでもないし？問題あらへん、あらへん！  
(震え声) ウン、モンダイアラヘン…アラヘンッテイウタラアラヘン。

問題あるんやろうなあ、この世界速い人多いやろし。

「あとは斬魄刀なんやけど……。」

現状ボクは斬魄刀を持ってない。生まれてこの方刀なんて持ったこともないし、見たこともない。

「鬼道も使えるのに、斬魄刀がないつちゆうのも考えづらいんやけどなあ。」

この問題は考えてもしゃーない…これも自分の身を守るためや、今できることをやっていこか。

「目下の問題は

この汚れとケガ、どう親に説明しよか？」

気が付けばもう夕暮れ時で、家に帰らなあかん時間になっていた。ところで、話変わるけど今世のボクが生まれ落ちた家についてやけど…

「こおら、ギーン？何ですか、そのけつたいなケガと土汚れは？どないしたらこんな汚れるんです？説明しなさい。」

「いや、ちやうんすよ、お母さん様。これはあの、公園の木に登ってたら落ちてもうただけです。」（早口）

「ふーん？おかしなこと言いはりますなあ？木から落ちた、という割には背中側はほとんど汚れてあらへん。そのくせ、正面はえつらい汚れ様ですなあ？」

「いや、あの、腹側から地面にダイブしたんです。」

「へえ？腹から落ちはつたのに正面にケガしはらなかつたんで？」

「え、ええーと、そのお…」

「ギン、詰みだよ。諦めな？こうなつた母さんには勝てない。」

目の前におわす、銀髪で和服にエプロンを着けた見た目10代といつても通るような女性、今世の我が偉大なるお母さん様、『市丸華』

そして、ボクに諦めろと言いつつ隣で同じく正座をしている、見た目20歳代ぐらいで白髪長身の男性が、今世の父親である、『市丸彼方』

「見捨てんといってくださいよお父さん様。諦めたらそこで試合終了やってどこぞの先生も言つてはつたやないですか。」

「そうやって現実逃避するのもおすすめしなかなあ。火に油を注ぐだけだし。」

「へえー？彼方さんはうちのことそう思つてはつたん？わかりました、お望み通り説教追加やよ。」

「なにやつてるん、お父さん。口は災いの元ですよ？」

「ギン？なに他人事みたいに言うてはるんです？あなたも説教追加や。」

「ほんま何やつてくれはるんですか、お父さん様。」ガツクシ…

とまあ、こんな感じで案外普通の父母ボクの三人家族の家庭に生まれ、こうして無事説教を受けているわけで、あ、わかつてると思うけど、今世のボクの名前はちやーんと『市丸いちまるギン』やよ？

「……………ちやんと聞いてるん？ギン？」ゴゴゴゴ……………！

えらい恵まれて、幸せな家庭に生まれたなあ、ボク。

## 転生後のプロローグその2

—1時間後—

side：ギン視点

や、やつと説教から解放された…。

やあやあ皆さんこんにちわ、市丸ギンやよ。今やつとこさお母さん様からの説教から解放されたんやけど。

「ボクが説教されるんはわかるんやけど、父さんはなんで怒られつとったん？」

「ああ、それね。実は今度の週末母さんと出かける約束があっただけだね、その日に休日出勤が入っちゃったんだよね。で、しかもそのことを母さんに言うの忘れちゃつてさ、それで怒られてた。」

「なるほど、そらキレられますわ。」

「でも……」

怒ってる母さんもかわいかったなあ。」(〃・U、〃)ゞ

「息子ん前であんま惚気んでください。砂糖吐き散らかせたいんですか?」

うちの夫婦仲は悪うないんよな。むしろ良すぎるといつてもええ。この家に生まれてこれて幸せモンや思うとつたけど、いい意味でうちの困った点やね。いつてらっしやい・いつてきますのキスは当たり前やし、記念日とかにはデートいうて、僕を預けて一緒に出掛けとこともある。ただ、そのせいで毎回のろけを見せられて砂糖吐きそうになるボクの身にもなって欲しいねなあ。まあ温かい家庭であることには変わらないんやけどね?

ギン視点：s i d e o u t

―3ヶ月後―

side : 第三者視点

『破道の三十一！赤火砲!!』

放たれたバレーボール大の赤い火球が10 m先に吊るされた的に向かって飛び、的を粉々に破壊した。

「……とまあこんな感じや。力の流れ、ちゃんと感じられました？ギン？」

「うん、ちゃん見えたで母さん。」

現在、ギンは鬼道を習っていた。自分の母親である、市丸いちまる華はなに。

なぜこうなったのか、それは少し時間を遡る……………

それは1か月前のことだった。ギンが鬼道を使えることがわかった日から2ヶ月が



経ち、あれから毎日のように鬼道の修行をしているが、少し行き詰っていた。

「うーん、改めて思うと市丸ギン身体ハイスベック過ぎるなあ。破道なら七十番代まで、縛道なら六十番代までならもう使えるし：ああでもアカンなあ、詠唱破棄だけがうまくできひん。」

そう、詠唱破棄がどうしてもできていなかった。だからどうやったらできるのかずっと悩み、周りが見えていなかったのだ。さっきのセリフをつい家の中で言ってしまうくらいには。

「あら、ギン。もうそないに鬼道使えるん？ さっすがうちの子おや♪」ニコニコ

「そこは『うちら』の子って言っほしいかなー？ 華さん。」

.....

「ううえ?! なんと父さんと母さん二人ともボクの部屋ん中おるん?!」

「あら、うちらはちやんと声もかけたしノックもしたんよ?」

「で、何にも反応がないし部屋の前に来たら来たで、ウンウン唸り声が聞こえるからノックして入ったってわけ。」

そう言いながら目の前に座っている二人。市丸家の家は少し小さめの武家屋敷であり、和風の家である。そのため、あまり部屋の防音はしてあるが、完全とは言えない程度のものだ。故に、ギンの唸り声が部屋の外から聞こえていたとしても仕方のないこと

なのである。

「ど、どこから聞いてたん？」

「改めて思うとくっつてところからかな？」

「ほとんど最初からやらないですか。」

「ああ、ギンが鬼道が使えるんは2か月前から知ったで？」

「はあ!!??」

「お父さんと一緒に一時間説教受けた日あったやろ？そんな時にやたら強い霊力の残滓つけて帰ってきたなとは思ってたんよ。で、それが連日続くもんやからもしかしたら？って。」

「ギンは気づいていなかったみたいだけど一度修行を二人で見に行ったこともあったんだよ？」

母さんを抑えるのに苦労したよ、と苦笑いの彼方に、あん時すぐにでも抱き着きたかったんにほんに彼方さんのいけず、と返す華。

「さつきからツツコミどころ多いんやけど？ 母さんのその口ぶりから察するに二人とも鬼道使えるん？」

「正確には母さんが使えるよ。でもその前に僕たちのことについて話さないかね？」

「そうですね。まずうちの家系について、うちは代々退魔の家系でな？ 特別な力を持つてるんやけどギンはもう知ってるやろ？」

「鬼道、やろ？」

「そ、ギンはなぜか独学で使えてるみたいやけど。まあそういうわけでギンのはうちの家系の遺伝つちゆうわけや。」

「ん？ 母さんの家系の遺伝なのはわかったけど、父さんの方は？」

「僕の方は普通だよ？ 精々独自の剣術があるくらいさ。」

「お父さん、それ『普通』言いません。」

「とうか、彼方さんのあれが精々とか冗談きついすわ。」

「えー。」

「さて、うちのことは話したわけやけど。」

「そろそろ、ギンのことが聞きたいかな？」

side:ギン

うーん、あそこまで聞かれてしもうたんやったら、もう隠すのは無理やろなあ。つてもどこから話せばええんかなあ?」

「ギン、ギン言葉に出ちやつてるから。」

「なんやこん子がここまで子供らしいん初めて見たんちやうやろか?」

「話しづらいんだったら僕たちが質問する形にしようか?」

「せやね、それやったら答え方も簡単やし考えもまとめやすいやろ。」

「うん、その方がありがたいわ。」

「じゃあ最初はうちから、ギンってさ何者なん?今まで触れとらんかったけど、小学1年生でその精神の成熟具合は大人びてるとかのレベルちやうで?」

ん?」

「だって、特にこれといった我儘も言わへんし、学校ん事聞いても年相応の無邪気さもないやろ?言つとくけど、ギンを育ててきた中でうちらが困った事つてこの幼気の無さぐらいやで?」

「あ、あー確かに。今更ながら考えるとおかしすぎるか…うわ、それも迂闊やったなあ。」

ほんまに今更過ぎるなあ。なあんで今まで気づかんかったんやろ、思わず頭抱えても  
うた：

「ボク自身の話となると、えらく奇想天外やしなあ。念のために言つときたいんやけど、  
今からボクが言うこと全部ほんまのことやから。」

そうして、ボクは今までのことをすべて話した。自分が転生者であることも、この身市丸ギン  
体が前世のアニメキャラであることも、前世で知っていたから鬼道を使えたことも、そ  
して、この世界が『ハイスクールD×D』の世界であること、全部や。

「まあ、信じられんやろうし、世迷言と捉えてもらつてもかまへんよ。ボクも聞く側にな  
つたとき頭おかしいんか？つて思うし。なんなら、気持ち悪い子おや、て捨てても」  
ああ、アカンなあ、声震えてきた。気持ち顔熱いし視界もにじんできよつたわ。でも  
言わなあかん。こん人らに迷惑はかけられへん。でもボクは最後まで言い切ることが  
出来ひんかった。次の瞬間には目の前が真っ暗になり、少しだけの息苦しさを覚えた。  
でも、不快な感じはせえへんし、頭をなでられている手からは温もりを感じる。

ああ、ボクは今、母さんに抱きしめられてんのか…

「今までよう頑張りはったね」

「言えるわけあらへんかったよね、怖かったやろ？言つたとしても気味悪がられて拒絶されるかもあらへんし。人が一番怖がるんは『拒絶』や。自分のことを否定され、距離を置かれんは嫌やからな。よう言うてくれたなギン、ほんまおおきに。」

「ただ、一つ付け加えるとしたら、僕たちがギンを捨てることなんて絶つつつつつ対無いから。それでも、ギンは疑い深いだろうから言わせてもらおうよ。」

二人がお互い見合わせた後、せーのっ、と呼吸を合わせて

「ギン、僕ら／＼うちらの子どもに生まれてきてくれてありがとう。そして、愛してるよ。」

「ギンは生まれた時からギンやったんやろ?」

「なら、君は僕らが愛する『息子のギン』であることに変わりはないさ。」

言い方はちよいと変わってるけどな、と笑顔でこちらを見ている二人。息子がとんでもないこと言うてんのにボクから目線を外すことなく真っ直ぐに見てくる。

ああ、ほんまに。ほんまに今更ながら気づいたわ、ボクはこん二人のこと大好きなんだよ。二人に嫌われたくないから隠してきたし、誤魔化してきた。二人の迷惑になりたなかったから我儘も言わんかったし、我慢もしてきた。でも、もう我慢はできそうにないなあ。

「ボクの話信じるん?もしかしたらデタラメ言いよるんかも知れへんよ?親の気を引きたい子どもの妄言かもしれへんのに…」

「そういう子は自分からそんなこと言わないよ?それにさつきも言ったよ?『僕らはギンを愛してる』って。信じるよ。だってほかでもない息子のことだもの。」ギユツ

そう言うど、ボクと母さんを包むように抱きしめてくれた。

「むう、お父さんに言いたいこと大方言われてしもた。ギン、同じこと言うようやけどうちもあんたのことを信じとるで？つまり、何が言いたいか言うと、うちらはギンのことを信じてる。ギンもうちらのこと信じてくれん？あと、今までしつかりとした姿見せられ続けた子から聞いたことがあないすごいことやよ？ギャップがありすぎて逆に信憑性が増すつてもんや。こう言い方したほうがギンもわかりやすいやろ？」

やから、と続けて

「安心しい、もう…我慢せんでええんよ？」

すでに限界やったのに、ほんま親つてすごいなあ。

そこからはもう決壊に次ぐ決壊やった。前世も合わせて過去最大に泣いた。後日、二人曰く『赤ちゃんの時よりも泣いてたのでは』とのこと。



「さて、ギン？落ち着いた？」

「っグス、ん、なんとか。」

「なら、ギンにもつと言っておきたいことがあるんやけどいい？ええつと、言っておきたいことは全部でえひい、ふう、みい、よお、いつ、むう……」

そう言いつつ指を折っていく母さん。えーと、皆さん…ボクは過去最大の号泣を見せた後、説教を受けるようです…小言どんどん増えてつてるしい（泣）。ふと、父さんの方を向くと、すつ、と抱擁を解き、離れてつた。すれ違いざまに、

（僕も思うところはあるからね。ちゃんと受けるように。）ニコッ

と言つてつた。こん時が初めてやつたなあ…父さんに対してゾツとしたん。

「ギン？まずは、親を舐めへんように。再三言うように、悪いんやけど、うちらはギンのこととを愛してる。そのことはちゃんど覚えとき。次に……」

―説教終了―

「はい。華さん、一旦そこまで。ご飯温めなおしてきたよ。」

「そう言えばご飯の前でしたね。まだ言いたらへんけどこの辺にしときます。」

「ハイ、リョーカイデス。」

「あ！あと、ご飯の後鬼道のことについて真面目に話すことあるから。」

「ハイ、リョーカイデス。」

「ギン、しゃんとしい。悪乗りがすぎるで？ほんまに真剣な話や。」

「あ、ういっす。」

―食事終了―

「じゃあギン、わかってはるとは思いますけどその力、鬼道はまず人前で見せんこと。そして少し被るけどむやみやたらに使わんこと。」

「それはもちろんわかっとります。」

「それならよろしおす。」

「でも、それなら修行するときどうするんです?」

「ギンは気づいてなかったみたいやけど、前ギンが修行してたときは周りに結界を張ってたんよ。やから今度から結界の修行も一緒にしまひよ。そんな時はちゃんとうちか、お父さんに言ってからやるように。」

「ん、父さんも結界張れるん?」

「ええ、ギンの修行を流石にうち一人で見るには予定が合わないときとかに交代してもらったので。」

（まあ、さすがにそのためだけに結界の張り方を教えてほしいって言われるとは思わへんかったけど…）

「ほんなら次です。これが一番重要なことですけどギン修行してた鬼道は前世での知識が基にしてたんよな?」

「うん、そうやけど?」

「それなら、どれぐらい合致してるんかすり合わせしまひよ。」

「うん、大体あつてはりますね。なら、最後に今後の鬼道の修行の予定やけど…」

「あー！お母さんだけズルい！僕だつてギンに色々教えたい！」

「ほなら、父さん劍使える言つてはりましたよね？それ教えてもらうことができます？」

「うん！大丈夫だよ！！けど、劍を教える以上、かなり厳しくすると思うけど…いける？」

「なんや、鬼道の修行が軽い言われてるみたいに感じるんは気のせいやろか？」

「いやっ！別にそういった意味で言つたわけじゃないよ?!」

「あのー、修行に関してはボクの身体の成長に合わせてくれるとありがたいなあ思うんですけど。あと、どちらか体術も教えてもらうことってできますか？」

「なら僕／うちが!!」

「むー！なら母さんと僕の二人で体術は見るつてのはどう？」

「賛成です。なら、鬼道の修行と並行してこれからの予定を改めて決めまひよ。」

…の結果。

「あの、これかなりハードスケジュールやないですか？」

月・水…：鬼道

火・木…：剣術

金・土…：体術（交互）

「流石に詰め込みすぎかな？」

「じゃあ、こんなのはどうです？」

月・水…：鬼道

火・木…：剣術

金…：体術（交互）

「あんま変わってる気いしないんですが？」

「あら？ 週休二日やからまだ優しめやないの。」

「そう言えばギンが自衛のために鬼道を修行してたのはわかったけど、それ目的だったらこんなに過密にしなくてもいいんじゃない？」

「確かに自分 “だけ” 守るんやったらこれは行き過ぎなんでしょうけど、それじゃあ足りないやないですか。自分以外にも、その、

「二人を守るなら。」／／／カオマツカ

「ああもう！うちの息子がこんなにもかわいい！！！」

―そして時は現代に戻り修行場である山の中―

「今のが詠唱破棄時の霊力の流れです。あと、ギンは鬼道を扱う時、何をイメージしてはりますか？」

「そらその鬼道の発動されたときの形や色です。」

「なら今度はその鬼道の効果も含めてイメージしてみたらええよ。赤火砲で言うたらのに当たって破壊するところや断空やったら空間を二つに分けることとかやね。」

「なるほど、確かにそこまでイメージしたことあらへんかったな。」ツスウー、ハアー

さっきの母さんの霊力の流れも含めてイメージして……

「『赤火砲』っ！」

放たれた火球はギンと的とのちようど中間地点で消滅した。

「あら？ほんまにいけてもうた？………ぐえっ！」へギーーーーーーン!!

「ほんまに!!うちの子はー!!もうっ天っ才!!」ギューー!!

「いや、あのっ!途中で消えても打てるんですが…」

「なに言うてるん!ほんにこの子は!ちよこつとアドバイスしただけで詠唱破棄成功させといて天才言わんでなんて言うん!!」ワシヤワシヤ!!

「だあああ!もうええやないでしょ!!」バツ!

「ああん、こんいけずう。もうちよつと撫でさせてえな。うえええん、ギンがぐれたく。」  
「ほら修行、しますよ!!」

「むー、まあええわ。じゃあ再開しよかって言いたいところやけど今日は体術メインやよ。」

「全身に巡らしい、途切れさせへんように!とめどなく!…そこ!靈力に氣いまわしすぎ、拳が疎か!」

今の修行は靈力を身に巡らせながら組み手を行ううちゆうやつで、母さんに身体の靈力の流れを見てもらいながら少しでも流れや集中が乱れたりしたら言葉とともにしぼかれるんよ。そう、しぼかれる。ボコられると取ってもらってもええよ。さて、ところで皆に問題です。ボクは今どこにいるでしょーか?…:…:…正解はなんと!!



空中です

「つ!!ぐつ!!がつ!!」ゴロゴロ!

「ほら、どないしたん。はよかかって来い。」

「げほっ!げほっ!…クツソ。もう一回!!」

ていうかこれ、ほんまきついんやけど…少しでも氣い抜けへんし、精神的にも追いつめられる。氣い抜いた次の瞬間には地面との熱烈キツスが待つてんねんよなあ。

ギン視点:s i d e o u t

ー修行終了ー

s i d e : 第三者視点

「がむしやらに攻撃すればええつてもんやないで? 体の内と外の力の流れを意識しい。攻撃するときにバラバラにぶつけても威力が弱なるだけになるで。」

まあ、こればかりは慣れな難しいかな、と死満身體魂なギン体の横にしゃがみ、ニコニコしている

華。

「ハア、ハア、か、母さんは合気も使ってるんやっけ。」

「まあ力の流れ云々は確かに合気始めてから掴んだかなあ。ギンもやってみる?」

「…実際に今体感してるんで遠慮しときます。」

「仕掛ける側と仕掛けられる側やと色々違ってくるもんやで?」

「うーん、でもこれ以上あれもこれももってなると器用貧乏にならへん?」

「そうかもしらへんけどやるだけやってみいひん? もしそうなりそうになつたらうちが止めるよって。」

「確かに母さんの言うことも一理あるか。」

「このあとギンはさらに転がされることになるのだったが、当の本人はまだ知らないのだった。」

ーまた後日 父との修行の一面ー

「つてことになつたんよ。」ブン!ブン!

「へー、それならこつちでの体術は少し抑えたほうがいいかな。体の使い方が違うだろうし、それでケガでもしたら元も子もないしね。」

「助かります。楽とは思っていませんでしたけど、ちよつち辛いんで。」ブン!ブン!

「ハハハッ! やっぱり母さんの修行はきついのかい?」

「そらきついですよ。もう鬼ですよ、鬼。」ブン！ブン！ スン！

「ん、今少しブレたね。素振り10本追加ね。」

「ここにも鬼が居はった…」

まだ子どもの身体故に軽めであるがそれでもかなりギリギリを責めた修練であることには変わりなかった。それでもそれについてこれたのは持ち前のメンタルとスペックの高さが功を奏したのだろう。

このしごきの成果がみられる機会は案外すぐそこに…。

## 転生後のプロローグその3

side：第三者視点

そこは森の中の少し開けた場所、その中心には大きめの岩がありその上にはギンが座禅をしている。と、突如座っているギンに向って巨大な蒼い炎が飛ばされた。対するギンはじっと座禅をしたままで動こうとしない。

「縛道の八十一

『断空』

炎がギンを飲み込むことはなく、その一線から全くそちら側へ進むことができないようだ。

「7時の方向、距離40m、ってどこかな？」

「正しく解！さっすがギンやね。断空はもう完ぺきといつてええし、探知の方もぼつちりやん。もう探知だけで言うたらうちら以上かもしらへんね。」

「でもまさか『双蓮蒼火墜』を撃ってくるんは思うてませんでしたよ……座禅をし続けなあん修行やったからじつとしてましたけど内心ヒヤヒヤやったんすからね？」

ギンが行っていた修行とは『座禅をしているギンに向つて鬼道を放ち、それを断空で防ぎ、その放たれた方角と距離を当てる』という簡単なものだったのだが、今までは下級の破道系鬼道だったものが今回は中級である『破道の七十三・双蓮蒼火墜』であつた。

「いや、ギンならもうこんくらい防げるやろな——つて思おてね？ 実際防げたやん。」

「もし防げんやったらどないするつもりやったんですか……」

「そんな時はそんな時♪」

はあ、とため息をつくギンと満面の笑みを浮かべている華。

「そう言えば、お父さんとの修行はどうなん？」

「鬼畜度で言うたら母さんと変わりませんよ。」

ー回想シーンー

「さあギン、始めようか！」

「なんでそないイキイキしてはるんですか…説明ください、説明を。」

ギンと彼方は向き合っており、それぞれ木刀を構えている。

「だってギンもそろそろ木刀を振るうことには慣れてきただろ？で、そろそろ試合形式もいいんじゃないかな？…と。」

「なんや段階えらいすつ飛ばしてる気いしますけどまあええわ。試合するんはいいですけど…まさか本気でやるんですか？虐待ですよ？」

「加減するに決まってるじゃないか!!流石に僕に子どもを虐待する趣味はないよ!」

「わかつてます、冗談ですよ。ほなそれなら…」ツス

「うん、それなら」ツス

「よろしくお願いします。」

そこからはひどいものだった。彼方から繰り出される斬撃に対しギンは何とか防いでいる状態。躲し、逸らし、時には転がり、正面から打ち合わないをしないようにしていた。恐らく、まともに競り合っていたとしたら木刀はギンの手から弾かれ、すぐに勝負は決まっていただろう。さらに、彼方の剣は徐々に鋭さを増しているように見える。「すごい！すごいよギン！正直こんなに打ち合えるとは思ってなかったよ！これならもう少しギアを挙げてもいいね！」

(まだ上がるん?!こちとら凌ぐんで精一杯やのに!)

「あのお、その……ごめんなさい。」

「ハッ、ハッ、ハッ……。こう、なる、前に！止め、て、ください、よー！」

試合からかれこれ30分程、時間になると短いようにも感じるが当事者にとってはその何倍もの時間に感じたことだろう。

結果としてギンがバテ、彼方にクリーンヒットをもらった形になった。

「ハッ！ハッ！……スウー、フウー！……なんで、二人とも加減を途中からできひんくなるんです。」

「いやー母さんともよく話すんだけど、あまりにギンの吸収が良くてね？ つついっししくなってしまうんだよねえ。」

〔【悲報】両親がもしかしたら戦闘狂かもしれない件。〕

「それでシバかれるボクの身にもなってください。」

「ハイ、ホントウニモウシワケゴザイマセン。でも、本当にギンはすごいよ！ 僕がギンの歳の頃は今みたいな攻防なんて全然できなかつたよ！」

「攻防なんて言えるもんやなかつたですよ。ただボクは直観に正直に動いただけです。」



実際父さんの動き、ほとんど見えへんかったんよ?」

「それでもだよ。ギン、これは正直自分で言うのもなんだけど僕はある程度強い。」

「ほんまに自分で言うのも、ですわね。」

「いいから、聞いて。僕はある程度強いんだ。その僕とその幼さで30分も戦えるなんて、誇つてもいいことだ。けれど、だからといって驕つてはだめだよ?」

「もちろんわかってますよ。」

「うん!それならいいんだ。」

—回想終了—

「あらあ、えらい鬼やねえ。」

「なんや鬼が何か言うてはりますわ。」

「おん?そない言うなら鬼らしく修行の量倍にしまひよか?」フッフツッ

「ぐえ?!冗談ですよね?これ以上は死んでまいますつて!殺す気ですか?!ほんまに冗談ですよね?」

「さあ♪どないしましよ?さて!時間も時間やからそろそろ帰るか?」

「いやっ!流さんとつてください!こつちにとつては死活問題なんです!」

## 第三者視点：side out

side：市丸ギン

ハイどうも、そんなこんなで家に帰ってきたギンです。現在、三人で晩御飯を頂いているわけやけど…

「改めて、ギンの天才っぷりには舌を巻くわあ。もう最近ではうちが教えられることも少なくなってきたとるし。」

「確かにねえ、母さんから聞いたけどギン？ギンが話した試合の話はもう何年も前のことじゃないか。今ではかなり長時間戦えるだろ？」

「それでも全然二人には及ばないやないですか。」

「まあ流石に、ねえ？」

「たった数年で追いつかれたとなったら」

「うちら／僕らの面目が立たへんよ／ないよ。」

そう、修行を本格的に始めてからもう4年が経った。でも、まだ二人には一度も勝てたことないよなあ。まあ流石に少しは腕上がったとは思うねんけど…。

「ああ、でも家事の腕やったらもううちらと同じくらいやないん？」

「確かに、このおひたしとかもかなりおいしいよ?」

「その点においてはまあ伊達に二度目の人生送ってないちゆうことやね。」

「そう言えば、ギン、母さん、今週末さ久しぶりにみんなで出かけない?」

「わあ!そらええね、最近ギンの修行やらなんやらで忙しかったし、息抜きにもちようどええやろ。」

「うん、ええ気分転換になると思うし。」

そして迎えた週末…今ボクらは車で少し遠方に来ており、その道中で足止めにあつとつた。

「ですからあ、これから先は通行止めなんですよ。」

「いえ、僕は回り道を知りませんか?と聞いてるんです。」

「そんなのお、聞かれてもわかりませえん。」

父さんと作業員とおぼしき人が言い争つとる。どうやら通行止めみたいやね。といつてもここは山道。この道以外回り込めそうな道もない。そして何よりこの作業員たち…不審な点が多すぎや。1つ、作業や言うてんのになんも看板を道中見かけへんかった。2つ、作業する割に作業員たちが軽装すぎる。3つ、これが一番やけど作業車、軽トラやレッカー車などが一切見当たらん。怪しさ満点、役満や。一応、周囲の探知やつといたほうがええかな…

ん?なんやこれ。

すると、父さんと言い争つとる作業員にほかの作業員が寄ってきた。

「もういいんじゃないツスカ、先輩?どうせこんなところで一家一つ消えたところでそんな問題ないっスヨ。」

は?

瞬間、ボクの視界は火で埋め尽くされた。

「ギン！華！無事か!？」

「うちもギンも無事やで。」

「そない大声出さんでも聞こえてます。」

もう視界に火が見えた時点でボクと母さんは車の外に飛び出し、父さんのそばに寄っていた。

「軽口叩けるくらいには冷静みたいだね。」

「そらあんだだけ怪しかったら警戒の一つもしますよ。というかこんくらい出来へんかったら修行の時点で死んでます。」

「まあねえ、もしギンが下手うってたらうちらが修行付けた意味があらへんもん。」

「二人とも、おしゃべりはここまで。お相手さんが来たみたいだよ。」

「てめえら！どうやって抜け出しやがった?!いや、それはもうどうでもいい！お前ら普通じゃねえな？俺らのことを見られた以上、生かして帰すことはできねえ！ここで死ん

でもらう。」

(自分から尻尾出してきよったくせに) ボソツ

「ギーン? そういうんはわかってても言わへんの。お相手さん可哀想やろ。」

「だーかーら、二人とも緊張感〜。」

「クソが、舐めやがって…まずはそのクソガキからぶっ殺してやる。」

「あ?。」

「はい、お二人さん落ち着いてくださいねー。」

「いや、自分らの子ども馬鹿にされて怒らないわけないでしょ／やん。」

「せっかくのお誘いや。断るんは失礼やろ?。」

それに、と続けて。

「丁度今日お披露目しよう思うとったんですわ。」

それは数か月前、いつもの修行場にて…

「やっぱり、わからへんなあ。」

今まで保留にしていたけど、ボクが転生した時に与えられた特典。『市丸ギン』と書かれてた割には能力が少ない。言ってしまったえば範囲が狭いんよな。斬拳走鬼の内二つしか使えへんつてのも中途半端な気がするし。

ん？ 『転生』？ そういえばここはあの世界なんよな

…つて…こと…は？

「あるよな？ あれ…。うわあ。これ…ボクのポカやん。」

あれの発現方法って自分の中で一番強いものをイメージするんやっただけ？ 原作者人公みたくやつてもええけど、ボク市丸ギンっていうたらあのフリーズよな。

「君がく」

「君が明日蛇となり人を喰らい始めるとして、人を喰らったその口で僕を愛すと咆えたとして、僕は果たして、今日と同じように君を愛すと言えるだろうか」

その言葉をつぶやくとともにボク自身が無かに包まれるのを感じる。いや、感じるんだけやない。実際にボクの胸を中心としてBLEACHの死神におなじみの死覇装（しくはくしよう）が広がっていく。ん？隊長羽織？そないけつたいなもん着けとらんよ。そこまでまだボクは強くないし、驕れるわけないやん。

「ギン。その姿は…一体？」

「…なんやえらい真つ黒な着流しやね。」



「説明は後でします。ここはボクに任せてもらえます?」

「すごく気になるところだけど、わかった。勝算はあるんだよね?」

「少しでも危なそうやったら手えだすからね? しっかり勝って来い!」

「ほんま二人ともおおきに。」

さて、じゃあいつちよやるか!

ギン視点: side out

side: 第三者視点

「はっ! こけおどしか? 恰好が変わっただけだろ!」

ぞろぞろと鉄パイプを持った男が10人ほどギンにゆっくり向っていく、それに対してギンも同じようにひたひたと歩いていくが、突如その姿がぶれるように掻き消えた。

「! なっ!」

あまりに突然のことで男たちが動揺したと同時に見ていた景色がガラツと変わった。

「: 縛道の四『這縄』。まあ一本三人が限界かな。」

男たちが自分のことを見ると腰に光の縄のようなものが巻かれ、三人一組で縛られていた。男たちはわからなかっただろうが、ギンがやったことは簡単で、瞬歩で近づき這縄で縛っただけである。

「はあ!?!」

「彼方さん、今の見えた?」

「どうにかギリギリだね。修行時とは比べ物にならない。何倍も速くなってるよ。」

「しかもギン後述詠唱なんて高度なもんだ。なんや成長がうれしいはずなんやけど、少し寂しくも感じるなあ。」

「僕も複雑な気分だよ。多分これが巢立ちを見る親の気持ちなんだろうね。」

「さて、拘束し終わったわけやけど、なんで通行止めなんてしてはったん?」

「い、言うわけないだろ!」

「…破道の十一『綴雷電』つづらいでん」

ぎゃあああああー、と拘束されている男たちの一つのグループから悲鳴が上がるとすぐに静かになった。

「なんで? 早よ答えなどんどん電撃強くしてくで?」

「た、頼まれたんだよ!! ここから先は誰も通すなって! 顔は隠してたからわからねえしどこの誰かも知らねえ! 報酬が良かったからそこまで気にしなかつたんだ!」

「その依頼はこの先の『追いかけて』に関係あるん?」

「は、はあ?! 追いかけて? 何の話だ!」

「なるほどなるほど……どうやら嘘はついとらんみたいやね。」

「じゃ、じゃあ！」

「うん、オヤ ス ミ♪」

バチバチバチ！

あゝあゝあゝあゝあゝ!!

今度は拘束されてるすべてのグループが一斉に悲鳴を上げて気絶した。

「華さん。」

「うん、彼方さん。思うとることは一緒やと思う。」

「うちの子、容赦なさすぎ……」

「……ストレス、かなり溜まつとつたんかもな。」

「確かにこの数年間、まともな息抜きをギンはしてこなかったかもしれないね。」

「何をコソコソ話してはるん？」

「ヒエッ!!」

「……何も悲鳴を上げんでも。」

「と、ところで！さつきギンが言ってた『追いかけて』って何のことだい？」

（露骨に話をそらしてはるけど、ナイスや！彼方さん！）

「露骨やけどまあええです。実は車ん中おった時から感知してたんやけど、この姿なるとさらに範囲が広がるんですわ。まあ端的に言うとなら以外にも襲われてる人らがいるみたいです。で、」

「それを助けに行きたいんでしょ／やろ？」

「まあほんとなら僕らも一緒に、つて言いたいところだけど…探知範囲が広がって見つかったってことはかなり遠いんだよね？」

「うちらと一緒にだと遅すぎて間に合わない可能性の方が大きいやろうし、今のギンの霊力からも考えると場合によってはギンの足手まといになつてまうか…」

予想外の反応に戸惑っているギンが口を開いた。

「…ふつーこんな時反対するんやないですか？というか反対される思うてたんやけど…。」

「正直、今のギンを止められる気がしないんだよねえ。」

スペック的にも、気持ち的にもね？、としようがない、とでも言いたげな父さん。

「それにね？手が届くのには手を伸ばさないのは…きつと後悔してまう。どれだけ時が経とうがきつと…ね？」

それで取りこぼしたんならなおのことね？、と苦笑いの母さん。でも、と続けて。

「ギンが自分自身こと話した時に一度うちが言った思うけど。」

「『この世界は物語や無い』やろ？流れはあつたとしても、全てが同じつちゆうわけやない。わかつとるよ。」

「うん。わかつとるんならええよ。うちから言うことはもうない、氣い付けていつてき。ただ！条件がある。それは……」

「……以上や。復唱してみ。」

「1、自分の命を最優先にすること

2、戦況が不利なら即座に撤退すること

3、自分の正体は秘密にすること

4、絶対に帰ってくること

5、助けた後はいつもの修行場に行くこと」

「僕からも条件出そうかと思っただけど、母さんの分で十分かな？」

「よし！ちゃんと覚えたみたいやね。ほな気張って来い！」

「はいー！」

返事とともに瞬歩で感知した方へと向かっていく。二人が遠ざかっていき、すぐに見えなくなった。

「ちゃんと無事で帰って来い……」

母さんの声が聞こえた気がした。

ギン視点：s i d e o u t

## 転生後の原作介入

side : 第三者視点

森の中を黒い影が通り過ぎてゆく。瞬歩でスピードを上げながら走っているギンの姿がそこにあった。ギンは今、死覇装を身に纏い、お祭りにあるような狐のお面を顔につけている。

(お面これやけにしつくりくるなあ。)

それはギンが両親と別れる直前：

「ギン！これも持って行き！」

「なんやこれ？狐のお面？」

「正体隠さなあかんに顔丸出しはまずいやろ？一応軽い認識阻害の術式もかけとるか





朱乃。」

あの人がこの襲撃に気づいてくれればいいけど。それは望み薄よね、せめてこの子だけでも……

「いたぞー！あそこだ!!」

「手こずらせやがって！とうとう追い詰めたぞ！」

「まずいもうここまで、思ったより早すぎる！」

「どうか！どうか！私はどうなっても構いません！この子だけでも助けていただけませんか?！」

「お母様何を言ってるの?!お母様がいなくなるなんてやだよ！」

「それはできぬ相談だ、朱璃。薄汚れたものと結ばれたお前もその血を受け継いだその忌子も生かしておくことはできぬ。ここで死んでゆけ。皆の者……殺れ。」

刀を携えた男たちがじりじりと近づき、刀を振り下ろす！

「朱乃!」「お母様あ!」

この子だけは！絶対に！

「お母様何してるの！なんであたしを抱きしめてるの!?逃げようよ！」

私と朱乃に向けられ、迫ってくる凶刃。ああ、あなた。生きられなくてごめんなさい。でも、この子だけは、朱乃だけは絶対に守って見せるから。この子のこと…私の分までお願いね？

しかし、待てど暮らせどその凶刃が私たちに届くことはなかった。

姫島朱璃：side out

side：第三者視点

「縛道の八十一『断空』。なんとか間に合うたみたいですね。というか、子どもがまだ諦

めとらんのにその親が真つ先に諦めるってどうなん？」

朱乃を抱えている朱璃ごと抱え男たちから離し、その間に立ちはだかったギン。朱璃たちに刀が突き刺さる寸前で断空が間に合ったようだ。

（あつぶな！ほんまに間に合わん思おうた…ギリギリ届いてよかつたわ。というかこれ、姫島襲撃かあ。バチバチに原作介入やん。まあしやーなし、ひとまず今は…）

瞬間、ギンの姿がブレ、断空に阻まれていた男たちが弾かれるように吹っ飛んだ。

「貴様！何処の者だ！まさか、もうバラキエルの手の者が来たというのか！」

「そんな敵相手に言うわけないやろ。」

「これは姫島の問題だ、貴様らに介入される筋合いはないわ！」

「知りませんよ。知りません。途中から聞こえてましたけど、そんなん勘当してはい、おしまい。でええやないですか。というか御家の歴史おいえだか誇りだかどうでもええんですわ。ただ、『そんなもの』のために子どもこどもの幸せ奪うな、いうだけです。」

「そんなもの…そんなものだと!?ふざけおつて！だが、一人だけでこの大人数を相手にするつもりか？」

「逆に、ボクがなんも用意してへんと思うんですか？」

いつの間にかギンの手にはオレンジ色の紐の様なものものが握られており、それは先ほど吹き飛ばされた男たちに繋がっていた。

「着火…」

「「なっ!!」」

ギンがつぶやいた後男たちを中心に大きな爆発が起きた。

「な、なにが…。(さっきの瞬間移動と言い、大爆発と言い、この子は一体!?! どうやら敵ではなさそうだけど。)」

(つーこら確かにきついなあ。霊力も集中力もかなり持つてかれてもうたか…。)

ギンが用いたのは『赤火砲』を練りこんだ破道の十二番『伏火』をさらに縛道の二十六『曲光』で覆い、見えなくしたものだ。それを最初に殴り飛ばしたときにつけていたのだ。これはBLEACHの原作、十刃全面戦争編で雛森桃が用いたものである。そしてこれは作中同様にかんりの霊力と集中力を要するものであり、ギンはそれをかなり消耗してしまっていた。

「お兄さん誰? あたしたちの味方なの?」

「まあ、そんなところやね。お嬢さんお名前は?」

「朱乃。 姫島朱乃。」

ええ名前や。とギンが答えるとすぐ、爆発によって起こった土煙の中から苦無くなが朱乃に向けて飛び出してきた。

「つ!! あつぶなあ…。」

咄嗟にギンが底い朱璃たちは無事だったが、代わりにギンの右腕に刺さってしまった。  
いた。

「貴方、腕が！」

大丈夫です。と答えつつ苦無を引き抜き、警戒を強める。徐々に煙が晴れ、男たちが見え始めた。

「ふん！ どうやら少しはやれるようだな!! しかし、我らはこの日のために集められた精鋭、この程度やられはせん！」

地に伏すもの、攻撃に激昂するもの、完全に意識を失っているもの、男たちの容体は様々であったが、立っているものと伏しているものは半々であった。

「その精鋭の半分がもう機能してへんみたいやけど？」

「そちらこそ、その片腕は動かしづらそうだな。減ったとはいえ、この人数を相手にするにはきついのではないか？ 今逃げ出すのなら見逃してやらんこともないぞ？」

「いやいやこんなにかすり傷ですよ。それにそんな悪モンの常套句言わんでもええですよ？ 逃げてもどのみち口封じで殺すつもりでしょうに。」

「ふつ、当たり前だ貴様がここに来た時点で貴様が死ぬことは確定している。」

「スウー、ハア…。そっちも殺しに来てるんや、こっちもそれ相応の対応をせなアカンやん。」

自分に言い聞かせるようにそういつたギンは腰に手を当て構えるようにしながらつぶやくようにこう続けた。

「おいで…『神槍』」

第三者視点：s i d e o u t

s i d e : ギン

「おいで…『神槍』」

構えていた手に重みが生じる。と同時に、

(おっそーそーい!!)

頭の中に少年の様な声が響いた。

(堪忍な? 案外呼び出す機会がなかったんよ。)

(そーれーでーもー！僕はもつと早く呼ぶことできたと思うなー！)

(まーまー、それに関してはほんま堪忍してな？今丁度力借りたいんやけどお願いできひん?)

(仕方ないなあ。今回はまあ折れてあげるけど、今度からもつと早く呼んでよね！)

(おおきに。)

「貴様！その刀！どこに隠し持っていた！」

「だから敵に言うわけないですやろ……。つとその前に。」

敵から視線を外さず、朱璃たちにか聞こえないように……

(今から簡易的な防御結界張るんで絶対にそこから出らんようにしてください。)

(あなたはその怪我でどうするの!?!それにさっきのあんな複雑な術式！消耗だつてあるでしょう！)

(さつきも言いましたけどかすり傷です。ボクはただの本命が来るまでただ時間稼ぎするだけです。まああわよくば倒しますけど。)

「お兄さん大丈夫？」

朱乃がこちらを見上げるように見てくる。まあ初対面相手に自分の命握られてるよ

うなもんやからなあ。不安がるのも当たり前やけど、この子の目はボクのことを本気で心配してる目や。ほんにこんな状況で優しい子やね。

「心配してくれておおきに。でも大丈夫やよ。朱乃ちゃんこそ大丈夫？安心しい、絶対にボクが二人とも守つたる。それでも、怖かつたら目え瞑つむつとき」ナデナデ

〃〃〃

「つと、流石に馴れ馴れしすぎやな…堪忍な？」

「ついつい撫でてもうた…アカンアカン、氣い緩みすぎやな。」

「ほな、結界張りますよ？縛道の七十三『倒山昌』」

朱乃たちを囲むように逆四角すいが現れ、覆つていく。

「さてさて、ここから先、進みたかつたらボクを殺してから行つてくださいね？ただボクも大人しく殺される氣いもないんで、殺す氣で行かせてもらいます。」

さあ、行こか？神槍。（やつと暴れられるんだね、ギン。）

「ほな始めよか、と言いたいところやけど…」

方角的にあつこらへんかな？

「ふん、どうした我々に背を向けて。今更おじけづいたか？」

「いやいや、ただ邪魔モン掃除しようつてだけですよ。」

倒山昌後方、木の上に向けて鞘から抜いて切つ先を向ける。



「はんっ！刀かと思えばよもやそんな貧相なものだとは…。そんなもので我らの相手をするつもりか。」

「なんやえらい好き勝手言いはるな。この子は貧相なんやない、この子は『脇差』や。まさか名家姫島の者ともあろう方が刀の種類もわからないとは思わへんかったなあ。まあ確かに普通のとは違おとるけどな。」

「射殺せ、『神槍』」

ギン視点：side out

side：第三者視点

「射殺せ、『神槍』」

そうギンが解号唱えた瞬間、刀身が一気に伸び、木の一角に突き刺さる。突き刺さるとともに、ぎゃあっ！と悲鳴が上がり、その木から肩に切り傷を負った男が落ちてきた。「あんま野暮なことせんとき、自分らに気づいたんボクやで？この距離なら絶対に見逃さへんよ。」

「ちっ！仕損じよって…。しかし、貴様の言う通り不意打ちはできぬようだ。」  
「先に言うとかで。こっからは全員、腕の一本は覚悟しいや？」

「ほな、行くで？」

そう聞こえた時にはもう遅かった。すでにギンは男たちの目前にまで迫っており、気づいたときには一人串刺しにされていた。

「があっ！」

「まずは一人…。」

「てめっ！」

一番近くにいた男がギンに反応し、斬りかかろうとするが相手は小柄な小学生だ。上手く一人目の身体で隠されそのまま突貫され、また一人神槍に貫かれる。上

「二人…。」

すぐさま神槍を抜き、付着した血を振り払う。そして真横に構え、また解号を唱えた。「射殺せ、『神槍』。(まだや、まだまだ！できるだけ広範囲かつ、振りぬける長さまで)……っ！ここっ！ぜえああ！」

神槍がグングン伸びてゆき、その長さのまま前方を薙ぎ払らうように振るわれる。つスパ！ゴゴゴゴ！

まわりの木々を切り倒しながら男たちを神槍が襲う。倒れた木々によりまたもや土煙が上がる…。

その煙が晴れ、周囲は死屍累々であった。先刻までは10人以上いた男たちが今では半分以上にまで人数が減っている。

「さてさて、結構今ので削れたかな？」

(言うても流石精鋭。強い奴だけ残った感じやな…。それはそれとして、今ので気づいてくれたらええんやけどなあ)

強者が残ったと言えど、それでも無傷というわけにはいかず、全員どこかしらに傷を負っていた。

「貴様…。無茶苦茶しおって。これだけの兵を集めるのにどれだけ時間がかかったと思っている！」

「やかましいな…。知らん言うてますやん。」

そう言いつつ、またもやギンの姿が掻き消える。

ガキン!!

流石に目が慣れたのか、現れた瞬間に男も刀を合わせ鏢迫り合いに持ち込む。

「二度はない!」

「チツ!」

ギリギリ、と競り合いが繰り広げられていると突如ギンの動きが固まった。

よく見るとギンの足元に先程の大薙ぎで倒れた男がギンの足をがっちり掴んでいた。

「我らをナメるなよ! 奴らは姫島の汚点! 子、共々生かしておけんのだ!」

「:別にナメてへんよ。それに:さつきも言うたけど、あんたらの都合で家族の幸せ、壊してええわけないやろ。しかも生まれてきた子どもにまで罪に問うなんざ自分ら、神にでもなつたつもりなん? 断言するで、『生まれることは罪やない』。あと、この襲撃、自分らの暴走やろ。姫島なんてデカイ家がある大事な事で何かしらの契約や規定を定めんわけない。もしくはその前ことを終わらすつもりやったんかな? とところでさつきあなた、ボクにナメんな、つて言うてはつたけど、ボク一人如きにこの体たらく……:ナメてるんはどつちや?」

競り合っている男の肩にギンが指先を向け：

―破道の四『白雷』―

鋭い雷が肩を貫く。痛みにとじろぎ、数歩後ろに男が下がった瞬間に：

―射殺せ、『神槍』―

足を掴んでいる男に神槍だけを向け始解により刀身が伸び、突き刺さる。男が手を離れたすきを逃さず、ギンは神槍を支えに地を蹴り上げ勢いそのまま目の前の男の顎先をかすめるようにように鋭い蹴りを放った。瞬く間に二人を戦闘不能にしたギンだったが、気付けば周囲を囲まれていた。

「囲め！だが、重なるな！あれの恐ろしさは貫通力だ。点ではなく包囲でじりじり詰めていくぞ。」

（こら困ったな、残りの霊力とかも鑑みるとこのレベルでこの人数、全員片づけんのは厳しいか…。）

!!…あはは、これは流石にご都合主義が過ぎるな。ならとる手は一つやな…。）

「先程の勢いはどうした？急に大人しくなったが、とうとう諦めたか？」

「鉄砂の壁、僧形の塔、灼鉄熒熒湛然として終に音無し」

「何をボソボソと言っているのだ、命乞いなら聞かぬぞ？」

「いやあ？命乞いなんてまさか?!ただ単に、ボクが戦う必要がなくなっただけですよ。」

今は目印を作っただけや。ほら上、見てみい。」

ピッ!と上を真っ直ぐ指差し、全員の視線を誘導する。その先には五本の大きな鉄柱が浮かんでいた。全員がその存在を認識したであろうタイミングでギンは手を合わせ…。

「縛道の七十五! 『五柱鉄貫』!!」

途端に包囲網の頭上にあつた五本の鉄柱が落下し始め、本日三回目の土煙が上がる。さらに、その中を黒い影が高速で動き回っており、所々で剣戟の音が響いた。土煙が上がる…。

膝について肩で息をしているギンが、そこにはいた。

しかし、ギンもただで疲れ果てたわけではないようで、男たちもかなり、刀傷が増え、出血量が少くない量になっていた…。

「フウ、フウ、フウ。最後に破れかぶれになったようだが、誰も削れることはなかった…

貴様の決死は無駄なことだったようだな。」

「いやいや、フウ、最低限の仕事はできたみたいや……。ボクがやつたんは数を減らすことと場所を教えること。あとは時間が稼げればそれでええんよ。ところで、そこおつててええの？あんたらが誰相手にケンカ売つたん忘れてるんちやう？」

ピカッ!!

ドシャーーン!!!

何の前触れもなく、強大な雷が襲撃者を襲う。それは『神の雷』と呼ばれた男が得意としたもの、そして此処に居ないはずであった者が放つた技であった。

「そのの者。君には感謝してもしきれない。よく私の妻と娘を守り抜いてくれた。君がいなければ私は大事なものを二つも失うことになっていただろう。ここからは私に任せて休むと良い。」

空から降りてきたのは墮天使『バラキエル』朱璃の夫であり、朱乃の父親である。真打登場!と言いたいところだが……

「その任せる相手、もう黒焦げになつてますよ?」

ギンの言う通り襲撃者たちはバラキエル登場時の大落雷によつて戦闘不能になつて

いた。落雷だけではそこまでなっていないなかっただろうが、『五柱鉄貫』が避雷針の役割を果たし、雷を集中してしまったことと、ギンがその前に切りつけ、出血してしまったため、集中した雷が流れやすくなっていたこと……この二つが重なったことで敵の殲滅という惨状が出来上がってしまった。

「まさかあの程度で倒れるとは、いや君がかなり削ってくれていたおかげか？そんなことより、妻と子供を助けてくれたこと、改めて誠に感謝する。君がいなければ少なくとも二人のどちらかが死んでしまっていたことだろう。」

「気にせんでください。って言いたいところですけど、あえて言わせてもらいます。

何してはるんです？」

突然の罵倒にバラキエルは鳩が豆鉄砲を食ったような顔をしていた。

「何言われてるかわからん、って顔してはりますね。ボクが言うてるんはなんで姫島のもんと結婚した人になんも対策せず、なに奥さんと子どもほっぽってるん？ちゆうことです。姫島との盟約やらなんやら有るにしろ無いにしろ、一部が暴走する恐れとかもあつたやろうに護衛の一人もつけんのはおかしいでしょ。他にも色々ありますけど、まあ、その表情を見るに貴方自身が一番わかってそうやな。」



ギンの説教(?)が繰り広げるなか、徐々にバラキエルの表情が苦々しく変わっていった。

「確かに、今回の件は私の落ち度だ。あまりにも私の想定が甘すぎた。もし、これで妻か子どもどちらかもしくは二人とも失っていたとしたら私は私自身のことを許すことができなかつただろう。」

「それがわかっているだけで十分です。」

ああそれと…、とバラキエルに向って歩きながらギンは続けて…。

「これはヒト全般に当てはまるんですけど、気持ちや思いは胸に秘めてるだけじゃ相手には伝わらないんですよ。さとりとかでもない限り、口にして伝えんとわかんないもんです。」

バラキエルの隣を通り過ぎる瞬間にボソツと、

(娘さん、今回の件で父親に懷疑心を抱く恐れがあるんで、トラウマの可能性も合わせてケアしてあげてください。もう結果は解いてあるんで…。)

バツ!!とバラキエルが振り向くとそこにはもうギンはいなかった。

「結局、彼?の名前も真意も聞けなかった…。煙に巻かれたままにされてしまったか。」

ギンの発言のせいとか、夜が更けているせいとか、頬を撫でる風がやけに冷たく感じるバラキエルであった。

場所は変わって、森の中。バラキエルたちの下からとうに離れ、いつもの修行場へと向かうギンは今回の戦いを思い出していた。

(今回は割と斬拳走鬼、どれも上手くできた。けど……あの<sup>襲撃者たち</sup>の人らを刺した感触……まだ手に残ってる。それに多分、殺した……よな。)

思い浮かぶは、最初に二人を刺した場面と足を掴まれ身動き出来ず、その対処として神槍を倒れている男に突き刺した場面。それに対してギンは困惑していた。他人とは言え命を奪ったことではなく、何にも感じていないことに……

(確かにこの<sup>死闘装の</sup>姿になるときある程度覚悟を決めていたとはいえ、なんも感じんのは想定外やなあ。気持ちまでこの身体に引っ張られるんか?)

悶々と悩んでいるうちに気が付けば目的地にたどり着いていた。

「さて、ふた「グボア!!」

到着した瞬間いつぞやの様に衝撃がギンを襲う。

「遅い!!今何時や思うとるん?!ケガは?!」

「ギン。腕にケガしてるね？ちゃんと応急処置でもすぐに手当てをしなくちゃ。ほら、こつちおいで？」

「ケガ?!なんですすぐ言わへんの!すぐ治療せな!早よ横なりい!」

すぐさま華に膝枕をされ、横になるギン。

「…母さん。回道も使えたんやね。」

「今はなんも言わんでええ、よくよく見たら靈力もカツカツやないの。今だけでも休んどぎわ。」

「よしっ!傷は塞げたし、出血も止まったな。感触はどお?」

「うん、痛みも引いたし、違和感もないし……あら?」

腕を少し上げ下げし、感触を確かめるが、何故か腕が震え始める。

「おかしいなあ?治療は正確にできたと思うけど……。つていつまでそのお面着けるとん?暑苦しいやろ。さつさと外しい?……震えはこのせいなあ。ギン、なんで泣いてるん?どこかほかにも痛いん?」

「……え?」

ギンが戸惑いながらも手を顔に当ててみるとそこには雫が落ちていた…。ギンは泣いていたのだ。

「な、なんで？」

「……。なにか今回の戦いであつたん？良かつたらギンの感じたこと、思ったことなんでもいいから教えてくれん？」

ギンは涙声ながらも、自分が恐らく人の命を奪つたであろうこと、そしてそれに何も感じていないことを話した…。

「多分、それ勘違いやで？何にも感じとらんわけない。今やつと気持ちを追いついたんやないかな？じゃなきや今頃涙なんて出てこおへんやろ。大丈夫、ギンの感情は死んでなんかおらへんよ。」

安心させるように頭を撫でながら、優しい声で答える華。

「お母さんの言う通りだよギン。」

「うおっ！びっくりした！おらんと思うたら…。」

「少し、用事があつたからね。それと続けるけど、ギンの感情はちゃんと生きてるよ。で、殺してしまった人に対してだけ…。こればかりはギンがどう整理つけるか決めなくちゃいけない。ただ、ギンがどういった形で整理をつけたとしても僕たちは責めな

いよ。忘れるもよし、ずっと覚えてるもよし。こう言つては悪いけどどこまで行つても死んだ人間のことだからね、どう受け取ろうがギンの勝手、つてね。」

少し投げやりすぎかな？と微笑む彼方に対し、少し俯き考えているギン。数分、悩んだ後ギンは顔を上げる。

「どうやら、気持ちの整理はついたのでかな？」

「うん、ボクは……」

多分、殺した相手のことは忘れんと思う。やけど、潰れるほど背負う気はない。今回は向こうも殺す気やったからなおさら……。何より潰れてまうくらいなら忘れんと思う。」

「…割とドライに考えるんだね。ああつ！もちろん責めてるわけではないよ?!」

「これかもしボクが事故的とか思いがけず奪つた命なら背負うつもりやよ？でも今回はどちらも覚悟を持って臨んだ戦つたわけやし、場合によつては侮辱に当たるやろしね？」

「うん、なんやギンらしくてええと思うよ？で、他にも何か思うところがありそうな顔し

とるけど?」

「なあんでバレてんの?……まあ、せやね。今回ではつきりしたんやけど、ボクはボクが生きたいように生きる。当たり前のことかもしらへんけど、母さんたちに話してみたいに、この身体は『BLEACHのギン』に似とる…。ただ似とるだけで一緒やない。ボクはボクで、彼は彼や…。」

「やから、生きたいように生きる…。好きに救うし好きに倒す。」

「どうやら、ギンはあつちのギンBLEACHを意識しすぎたようで、それも相まって今回感情が一时的なバグを起こしたようだ。というより、転生などと超常な経験したにもかかわらず今までメンタル面で問題が起きない方がおかしかったのだ。両親への告白時に取り乱したのは膨れ上がったものが少しガス抜きされただけで根本的には解決できていなかった。それが今回、自分は彼とは違うと自覚したことにより、ギンは本当の意味で『ハイスクールD・D』の市丸ギンとなった。」

「よかった、実はお母さんとそのことで相談しててね。今までのギンはどこか心と体がぎくしゃくしているように見えることが多々あったんだ。」

「いつか指摘しようか思うたけど、こちらはそんな体験したこともないし、言うても薄っぺらな言葉だけで説得力もないやろ?自力で解決できたようでも何よりや。他にも悩み事とかあつたら全然相談してくれてもかまへんからね?こちらはギンの親なんやから

…。」

「そんな時は是非頼らせてもらいます。」

「それじゃ、そろそろ帰ろうか？ギンはもう疲れたろう？この毛布を羽織つて、僕がおぶつて帰るから。はいっ、別に寝ててもいいからね？その姿のこととかはまた明日改めて聞くから。」

「今は言葉に甘えとき。ギンはまだまだ子どもなんやから。」

「おおきに、母さん、父さん。」

父の背におぶさつた瞬間、ギンの意識は薄れていき、すぐに寝てしまった。子をおぶる父親とそれに連れ添う母親…その光景は間違いなく家族そのものの姿であった。

そうして時はかなりあつという間に過ぎ去り、ギンは16歳になった。

## 旧校舎のディアボロス

読むのと実際に見るのじゃ衝撃が違うなあ

side：第三者視点

「ここはとある学園……。その校庭に男子生徒が三人、川の字になって寝っ転がっていた。」

「なあ、元浜、松田、俺たちは何のためにこの学校に入学してきた……」

「我が駒王学園は女子高から共学に変わって間も無え。よって男女比率は圧倒的に女子が多く、また海外からの美人留学生も多い。男子にとつては夢のような環境だ。」

「しかし我らは入学してこのかた、彼女等はできたこともない……」

「ああ、彼女欲しいなあ。」

「言うな、空しくなる。」

この三人は『駒王学園の変態三人組』と悪い意味で有名であった。最初に問いかけたのが『兵藤一誠』仲間内ではイツセーと呼ばれている。次にその問いかけに答えたのが『元浜』通称『エロメガネ』。最後に答えたのは『エロ坊主』こと『松田』だ。以上、『変態三人組』の大まかな紹介である。



「おっと、そろそろ行かねえと。」

「? どうしたんだよ松田。」

イツセーが松田に問いかけると、振り向いた松田は、鼻の下を伸ばし切った顔でグツ!と指を立ててでたらしくにやけていた。

場所は校庭から変わって体育館裏、三人はコソコソしながら移動していた。

「いやあ実はいいスポットを見つけてな。」

「まったたく、それを俺たちに言わずに行こうとするなんてズルい奴だ。」

「抜け駆けなんてさせねえからな?俺たちもしっかり楽しませてもらうぜ!」

三人が話しているスポットというのは、今流行りの店でもなく、世間一般の高校生の遊び場であるカラオケ屋やゲーセンのことでもない。覗きのスポットのことである!!これが『変態三人組』と呼ばれる所以である。今三人が向かっているのは女子剣道部の更衣室であり、その裏手に覗けるような穴が開いているのを松田は見つけていた。

「さあ、ここがそのスポットだ。ここからは静かにな?あまり騒ぐとバレちまうからな。」

「わかってる。さあ、この先には桃源郷が…。」

「つておい！これ頑張つても二人しか見れねえじゃねえか！お前らどつちか途中で変われよ?!」

いぎ、穴から覗こうとしていると突如後ろから…

「ああ、こちらアカン。」

何処からともなく声をかけられる。三人が目を向けるとそこには手を後ろに組みながらこちらに近づいてくる市丸ギンの姿があった。

「ゲツ！市丸ギン?!なんでこんなところに!?!」

「なんやえらい嫌われてるなあ?それと…こないなところ、はお互い様やろ?君らこそ何してるん?まさか、また懲りずに覗きなんてしよう、なんて言うんやないやろね?」

「イヤ！ベツニ?つてうお!!!」ベシヤツ

イツセーがしどろもどろになっていると後ろにいた元浜と松田に突き飛ばされ、前のめりに倒れてしまう。その隙に二人は逃げようとするが……。

「逃がさへんよ。」

ギンは後ろに回していた手を片手だけ前に出した。

「…縄?」

そう、ギンの手には縄が三つ握られており、ギンはそれを思い切り引つ張った。引つ張った瞬間、シユパアン!!

と三人の足に縄が括り付けられており、引つ張られた衝撃で逃げ出そうとしていた二人は地面に突つ伏すこととなった。

「な!いつの間にな!!」

「そら君らがここに来た時やけど?縄を毘として穴の前に置いといただけやよ。」

「まさか我らより先に来ていただと?!!」

「あからさますぎやと思わへんかったん?」「まさか、先に自分だけ覗いたのか?!」「ん  
なわけないやろ。穴見つけた時点で剣道部に言うて段ボールで向こう側から塞いでも  
ろうたわ。」

「我らの桃源郷をぶち壊すとは…貴様それでも男か?!」

「なんでそうなるん…?まあ、それは置いといて、これで君らは逃げられなくなったわけ

やけど…個人的には投降をお勧めするで？」

「こちらとて、無抵抗で捕まるわけにはいかんのだ！こうなればここで貴様をボコしても逃げてやる！」

「よく言つた元浜！それでこそ男だ！ここで日ごろの鬱憤を晴らすことができるチャンス！」

「松田の言う通りだぜ！モテない男の苦しみを思い知りやがれえ！」

「やめろイツセー！その言葉は俺たちにも効く！」

「えー？ほんまにやるん？ボク荒事は苦手なんやけど…しゃーないか。」

「松田！元浜！ジェットストリームアタックを仕掛けるぞ！隊列を組め！！」

「了解！！」

イツセーの声を皮切りに三人組が縦一列に並び、ギンへと突つ込んでいく。対するギンは後ろに組んでいた手を前に回し、隠されていたものが明らかに変わった。その手には竹刀が握られており、ギンも変態たちに突つ込んでいった。あわや激突するかと思われたが、ぶつかる直前にギンは跳び上がり、イツセーの肩を足場として思い切り蹴り飛ばし、

「何？！俺を踏みだ…おつぶええ！！」

イツセーは地面との熱烈なキスをする事になった。

さらに跳び上がったギンはそのまま後ろ二人を跳び越え、その途中で竹刀を一番後ろにいた松田は空中ひねりの勢いも乗せた竹刀の胴薙ぎを叩き込まれる。

最後に残った元浜は着地したギンの踏み込みとともに返された竹刀で松田と同じく胴に強烈な一本をくらった。

ここまでおよそ3秒。一連の（一方的な）攻防が瞬く間に終わり、しーん、と静寂が流れるが…その静けさはすぐに歓声が上がリ打ち破られ、その場を包み込む…。歓声の発生源はいつの間にか周囲を囲んでいた女子たちであった。

「ほい、いっちょ上がりつと…。」

「……ど、どこが『荒事は苦手』、だよ。」

「動きが全く見えなかった…。これがモテる男の力か……。」

「まさか我々のジェットストリームアタックを正面から破るとは…ガクツ。」

「まったく、ボクをネタに巻き込まんでもろて。」

三人を制圧したギンはフウ、と一息ついて…。パンパン、と手を叩き…

「ほらほら、お客さんのみんなも解散しい。時間は有限やで？少しでも充実した練習しいや？」

ええー、と残念そうな声上がるが、泫々女子たちは部活へと戻っていったが、ギンがそのうちの一人に声をかけ、



やグロッキー状態。そんな彼らをギンはいそいそと縛り上げ職員室まで引きずつていく。どこからか某出荷のあの歌が聞こえてきそうだが、そんな状況の中……

「なんで覗きの素晴らしさがわからねーんだよ！市丸ギン！お前さてはムツツリだな?!」

と覗きの素晴らしさを力説するイツセー達。松田と元浜がそうだ、そうだ、と続けている。

「人様に迷惑かけとんのに何言うてるん？君らこの学園じゃなかつたら即退学もんやよ？それに、誰かに迷惑をかけるぐらいやったらムツツリでも構わへんよ…ボクは。大体、こんなこととして、女の子の心に傷を残してもしたらどうないするん？最悪、男性恐怖症なるで？こないな事したら余計モテへんくなるやろうに、そんなせんかつたら君らモt…。」

「……モテそう、と続けようとしたギンであつたが、引きずつている三人をちらつと見た後、また前を向きなおし、

「ごめん、前言撤回するわ。君らの中で希望がありそうなのは一人くらいかな？」

「おい！なんで言い切つた!!あとその一人って誰だ！」

「いや、嘘言つたとしても傷つけるだけやなあ、と思うて。あと、ボクが言つた人は君らの想像にお任せします。」

後ろでやいのやいの聞こえるが無視し、気が付けばすでに職員室前まで来ていた。

「すみませーん。いつもの三人連れてきました〜。」

ギンがノックしながら声をかけると、中からドドド、と地響きが聞こえてきた。

「またか!? お前ら何度やれば気が済むんだ!」

中から出てきたのは生活指導員も兼任している男性体育教員…。因みにガチムチである。

「じゃあ、あとお願いします。」

「おう、市丸もありがとな!」

先生にイツセー達を預け、去ろうとするギンだったが、途中で、あつ、と声を上げて  
:

「今回は未遂なんで程々にしてやってください。」

「市丸の言いたいこともわかるんだが、何しろこいつらは常習犯だからなあ…。まあ頭の隅くらいには置いておこう。」

「ボクも言うてみただけですからそこまで気にせんでいいですよ。すみません、失礼します。」

縛られている三人には、バイバイと手を振ってギンはその場を後にした。



「相変わらず惚れ惚れするような太刀筋だったよ、ギン？」

「いきなり声かけんでや、裕斗？びっくりするから。」

ギンが階段前を通り過ぎようとすると、突然声をかけられ少しビクツとしてしまう。階段に目を向けると、そこには金髪碧眼の美少年がちょうど階段を降りているところだった。

「ごめんごめん、ギンを見かけたから居ても立っても居られなかったからさ。」

こちらに笑顔を向けるこの美少年は『木場裕斗』。ギンと同じクラスで所謂クラスメイトである。また、お互いに下の名前で呼び合う程度には仲は良いようだ。

「いつも言うてるけど、発言に気い付けや？捉えられ方によってはボクらにホモ疑惑が浮上すんで？」

そう、先程も言ったがこの駒王学園は元女子高である。つまりはそういう人人も多いのである。世間で言う、腐った方々が…。

「ねえ、あそこ見て！」 「うそ！金銀王子様揃い踏み?!」

また、ギンと木場はその顔の良さから『駒王学園の金銀王子』とも呼ばれている。そんな二人がなにやらよさげな会話をしているのだ…

「やつぱり『市×木場』かな?」「いやいや『木場×市』でしょ!」「純朴王子に迫られ、逃げられない飄々王子…:…良い!」

恰好の養分となるに決まっている。

「ほら言わんこつちやない。思春期だからしゃーないとしても、題材にされる身からしたらたまったもんやないんやで?」

「あはは、ごめんごめん。でも、ギンとは仲良しでいたい気持ちは本物だからね…。避けたりしないでくれたらうれしいかな?」

「誰もそないなこと言うてないやろ?ボクだって裕斗とはいい友達でいたいわ。」

「「キヤー!」」

「ギン?君分かってて言っただけかい?」

「はて何のことやら?」

ギンは肩をすくめながら笑って言った。

「ほんで？要件は？」

「あれ？要件がなきや声をかけちゃいけないのかい？」

「アカンことはないけど、顔に出とるで？僕は君に用がありますよー、いうて。」

「やつぱりギンにはバレちゃうか…。用というよりお願いなんだけど、明日の放課後少し手合わせ願えないかな？」

「明日かあ…。ゴメンな？明日は少し外せへん用事があるんよ。ほんま堪忍な？」

「そつかあ…。用事があるなら仕方ないね…。分かったよ。」

断られると捨てられた子犬のような表情になる木場。

「全つ然納得した、っていう顔には見えへんよ？ゴメンって、そない顔せんとてえな、代わりと言っちゃあなんやけど来週の月曜なら空いとるから、そこでならええで？」

とギンは謝りながら木場の頭を慰めるように撫でた。

「ギン？僕もう頭を撫でられるような歳じゃないんだけど？」

「なら、機嫌直しい。いつまでもしけた表情するもんやないよ。」

本人たちはじゃれあっているようなつもりだろうが、あまりにも周りへの被害が大きすぎた。ギンたちの周囲の道の角や陰では血だまりができており、その中心に女子生徒がぶつ倒れていた。絨毯爆撃もかくやな威力と攻撃範囲である。しかもごく一部は回避不能かつ致命攻撃。木場はギンの手をそつとどかしながら…

「とりあえず、言質はとったからね？来週の月曜日、忘れないですよ？」

「はいはい、まったく…決まったとたんにええ笑顔してからに…。」

ほな、／それじゃ、と言い別れた二人。過ぎ去った後は血の海（女子たちのほとばしる情熱で）であつた…。

時は過ぎ、フォーカスに変態三人組へと…三人は説教＋反省文を終え、駄弁りながら帰ろうとしていた。三人並んで歩いていると、ふと、イツセーの足が止まった。イツセーは振り返って校舎の一角を見ており、彼の眼は綺麗な緋色を映し、完全に心を奪われていた。視線の先には一人の女子生徒が…。それは駒王学園の中でも絶大な人気を誇る『二大お姉様』が一人、『リアス・グレモリー』が緋色の髪をたなびかせ、教室からこちらを見ていた。

「イツセー？どうしたんだよ？」

「ん？ああありやあ三年のリアスお姉さまか。やめとけやめとけ、手を出した瞬間、この学園の生徒全員を敵に回すことになるぞ？俺たちも含めて。」

「いや流石に俺もわかつてるって！ただ…なーんか目があつたような気がしたんだよ

「？」

イツセーが首を捻っていると松田と元浜はお互い目を合わせ、同時にイツセーの肩に手を置き……

「気のせいだ、童貞乙。」

「なっ?!それはてめーらもだろうが!!」

「それを言い出したらケンカだろうがよおー!」

「よろしい、ならば 戦争 クリューク だ。」

ぎやいぎやい言っていると、気が付けば校門まで三人は来ていた。だがそこで、今度は松田と元浜の動きがピタッと止まった。急に止まるものだからさつきまでじゃれ合っていたイツセーはそのまま二人にぶつかってしまった。

「痛っ!おい二人ともどうしたんだよ。」

「:おいイツセー。お前知り合いに黒髪長髪美少女いるか?」

「はあ? いやいねえけどよ。なんだよ藪から棒に。」

「今我らの先にその美少女がおつてだな、その美少女がお前のことを恋する乙女のような目で見ていいのだよ。これはことがことなら: : : 事案ですぞ?」

「俺らの友情にひびが入るな。ことがことなら、な?」

ええ? マジでそんな知り合いいねえんだけど: : :、と言いつつ元浜たちの言う方に目を

向けると…黒髪に映える白いワンピースを着た、イツセー達と同じ年くらいの女の子が門前に立ってこちらを輝く笑顔で見ている。

「いや？やっぱり俺の知り合いじや」あ、あの!!」

「あのっ！兵藤一誠さんですか？」

「あ、ああそうだけど…君は誰かな？多分初対面だと思っただけど…」

「私、『天野夕麻』あまのゆうま って言います。えつと…。その……！」

ひ、一目惚れです!!付き合ってください!!」

……

「は、はい」

「やった！じゃあこれ、私の連絡先です！明後日の日曜にデート行きませんか?!プランは一誠さんに任せます！決まったら連絡ください！そ、それじゃあ!!」

嵐のような騒ぎが過ぎ去り、しーんとその場は静まった。しかし、それは本命の大嵐が来る前の静けさであった。

「おやおや?」「おやおやおや?」

「松田さん?」「なんですか?元浜さん?」

「どうやらあ、ここに、裏切り者があ、いるう、みたい、デスヨ?」

「あらあらあら、それは大変ですわねえ。急いで肅清しなくてはなりませんわねえ。ねえ?元浜さん?」

ギギギと音を立てながら振り返るイツセー。そこには鬼の形相の松田<sup>修</sup>と元浜<sup>羅</sup>がその表情に似つかわぬ言葉遣いとトーンで物騒な話をしていた。あまりのその二人の氣迫に氣圧されたイツセーは何をとち狂ったのか、

「ツハ(笑)ー!」

挑発するという火に油を注ぐようなその場を収めるとは逆方向に全力で舵を切った。後に起こったのは言うまでもなく…まさしく大惨事大戦であった。怨嗟の化身と化した二人に対し命からがら逃げきったイツセーは家の自室のベッドの上でようやく自分に念願の彼女ができたことを実感し、その事実を噛み締めていた。

一方そのころ……

「なーんや、きな臭いなあ。この気配……」

いらんもんが入ってきたみたいやね？」

そして日は流れて……

イツセーの待ちに待った、初デートの日がやってきた。

「一誠、どうしたのそんなにソワソワして？」

「いや！何にもねえよ！っと、もうこんな時間か！じゃあ行ってくる！」

「あ、行っちゃった……。まったく、どこに行くかくらい言っていきなさいよ。」

「まあまあ、一誠の歳ならあれくらいヤンチャでいいんじゃないか？」

「いったいどの誰に似たのかしら？」チラッ

「ははは、いったい誰だろうねえ？」パイッ



「ごめん！夕麻ちゃん、待たせちゃった？」

「いえいえ、全然待つてませんよ？今来たところですよ。つてこれ、言うセリフ逆ですね。」  
フッフ

「はは、確かに。それじゃ早速行こうか？」

「そうですね、行きましょう！エスコートお願いしますね？結構楽しみにしてたんですよ。」

「うっ！退屈させないよう頑張るよ。」

こうしてイツセーの初デートはスタートした。無難なウインドショッピングに始まり、お昼は近くのレストランで…。午後からはもつと楽しませるぞ！と意気込むイツセーだったが、出鼻をくじかれることとなってしまった……

目の前のこの男によって。

「あれ？兵藤君、えらい別嬪さん連れとるね？もしかして彼女さん？」

「イツセー君？知り合い？」

「いやこんな奴知らないし、関わりたくもないね。さつ、行こうか夕麻ちゃん。」

「なんや連れへんなあ。まあええわ。…ん？兵藤君、兵藤君、ちよつち耳貸して？」

「ああん？なんだよ。男に言いよられる趣味ねえぞ俺は。」

「ええからええから、彼女さんにカツコ悪いとこ見せたないやろ？」ボソツ

「ハア？話が見えねえんだけど…。」

「襟！襟裏にサイズシール付きつばやで？内緒話のフリして取つたるから。ジツとしい。」

「マジかよ!?くっ！頼りたくはねえけど、背に腹は代えられねえ。頼む。」

ギンがイツセーに耳打ちするように近づき、イツセーがギンに隠れて見えなくなった隙に素早くシールを剥がした。

…：…イツセーのポケットに何かを仕込むついでとして。

「もう、二人で何話してるの？彼女を放っておくのはどうかと思うなく？」

「堪忍したつてな？ちよつと秘密のデートスポットを教えとつたんで。」

「ええ、どんなところ？」

「それを言ったら秘密の意味がないでしょ？ 後のお楽しみつちゆうやつです。さて、そろそろお邪魔虫は去りますね。ほなまた〜。」

「オイコラ！ そんなの俺知らねえんだけど?!」

イツセーの小声の抗議を無視して、ギンは足早に人込みへと消えていった。

イツセーのポケットに奇妙なチラシを一枚残して。

「ったく、あいつ…。ごめんね夕麻ちゃん、あんな奴気にしなくていいからね？ さ、デートの続きをしよう!」

イツセー達は気を取り直し、デートを再開した。楽しい時間というものはあつという間に過ぎるもので、気付けば既に日が暮れ、二人はデートの最終地点である噴水公園に来ていた。

「ここが穴場のスポット?」

「ま、まあね。結構綺麗だろ? (急ごしらえで考えたなんて言えねえ。)」

「うん、確かにいい所だね。…ここがいいかな時間的にも。」

夕麻はそう呟きながらイツセーに振り向く。

「イツセー君？ 私たちの今回が初デートじゃない。記念に叶えてほしいお願いがあるんだけどいいかな？ 誰か来る前に…。」

「う、うん。俺にできることなら何でも言つてよ。（『誰か来る前に』?! シチュエーション的に…ま、まさかキス?!）」

「ありがとう。じゃあ…」

死んでくれないかな？

「…??? ごめん、もう一回言つてくれないかな？ なんか聞き間違えたみたいだ。おかしいよな？ 死んでくれ、って聞こえるなんて…。」

「あら、何も聞き間違えてなんかいないわよ？ どうやら貴方は計画の邪魔になりそうなの。だからここで死んでもらうわ。」

ドスツ、

「…え？ ゴフツ」

イツセーの胸から光の槍の様なものが飛び出しているように見える…いや、正確には

夕麻の手からそれは伸びており、イツセーの胸に突き刺さっていた。それに気づいたイツセーはすぐさまとてつもない痛みにも襲われる。

（痛い痛い痛い痛い痛い、痛い!!なんつだよコレ!!なんで俺刺されてんだ?!ヤバイヤバイヤバイ!）

光の槍は引き抜かれ、それと同時にイツセーは地面に倒れ伏した。

「恨むなら貴方に神セイクリッドギア器を与えた主を恨みなさい?それと、貴方とのデート悪くなかったわ:初々しいガキみたいでw」

そう嘲笑をこぼし、背中に黒い翼を生やして空へと飛び立っていく夕麻。それをただ見ていただけのイツセーはヒューヒュー言いながらも自分の胸に手を当て、改めて自分の現状を実感した。

（うわ、手え真つ赤だ:これ致命傷だろ:）

イツセーの周囲は自分の血で水たまりができており、誰が見ても助からないであろうことは明白であった。

（見渡す限り、赤、紅、緋:ああ、緋色と言えば:綺麗だったなありアス先輩。どうせ死ぬならその前にあのでけえおっぱい揉みてえなあ:まあもう無理か。）

そんなことをイツセーが思っている横で、その周りには魔法陣のような何か広がっており、その中心にはギンがイツセーのポケットに仕込んだあの奇妙なチラシがあり、

光を放っていた。魔法陣と共鳴するようにさらにチラシの光が強くなり、目もくらむような今までで一番の光が放たれたかと思うと…

そこには先程までイツセーが思い描いていた、

『リアス・グレモリー』が魔法陣の中から出てきたのだった。

リアスはイツセーを一瞥すると蠱惑的に微笑み、

「あら？ やけに強い思いに惹かれて来てみれば…貴方、面白いわね。いいわ、助けてあげる。」

ーだから、私のために生きなさい？ー

そうリアスが言った瞬間、先程とは比べのならないほどのまばゆい光がその場を包んだ…。

その現場を誰かが見ているのには気づかずに…

「ふう、どうやら吉と出たみたいやね。でも、兵藤君には悪い事してもうたかも…一発殴られる程度で済めばええなあ。」

それは公園のすぐそばのマンションの屋上、黒い影がそこをじつと見ていた。「さて、見届けたしそろそろ行くか？」

そう言つて影は町の中へと消えていった…。

翌日、イツセーは自室にて何事もなく目を覚ました…：おっと、どうやらそうでもないようだ。いつもと変わった点が一つあつた。それは上半身裸であつたことである。イツセーが昨日の一件でパニクる直前、そこへ…

「イツセー…いつまで寝てんの…：つてあんたなんで上裸なのよ！起きてるんだつたら早く着替えなさい！風邪ひくわよ?!それと、時間大丈夫なの？」

母が部屋に入つて来、矢継ぎ早にまくしたてる。そして最後に付け加えたような母の言葉通りにイツセーが部屋の時計を見てみると…遅刻ギリギリの時間となつていた。

「ヤッベ!?!」

イツセーは頭がぐちゃぐちゃになりながらも急いで学校へと向かうことにした。

まだ自分に起こった変化を自覚しないままに……。  
第三者視点：s i d e o u t



なんや忙しないなあ、知つとる？これ一日の出来事やで

？

side: イッセー

ヤバイヤバイヤバイ！このままじゃ遅刻しちゃう!!

よう、皆！俺は兵藤一誠！現在通学路を遅刻しないために全力疾走中なんだ！つて俺は誰に向かって言つてんだ？……というか……日光つてこんなにまぶしく感じてたか？今まで。あとなんか体もだるいし……

「つて……こんなこと考えてる場合じゃねえ！急がねえと遅刻しちゃう!!」

……ん？あれっ？もう学校の門見えてんじゃん！なんかいつもより着くの早くねえか？

とか思つていたら門が今にも閉められそうになっているのが見えた。

「ま・に・あ・ええええ!!」

ズサー……!!

トツ！ツパ！カンツ！ツザ！

ふいふ、ギリギリスライディングで間に合ったか……ん？なんか俺と別の音しなかつ

たか?不思議に思った俺は横を見ると、

「いや〜危ない危ない。ギリギリセーフやね。」

「なんでてめえがいるんだよ市丸ギン。」

「そない邪険にせんとつてえな。あと、なんでおるんつてそら寝坊したからやよ?」

「つたく、なんでいけ好かない野郎の顔を二日連続で見なくちや…そうだ、ついでに聞いてみるか。」

「なあ市丸、お前きのう「兵藤君、これ急がなほんまに遅刻してまうんやない?」つてそうじゃねえか!ヤツベエ!」

「まだボクから言うわけにはあかんのよ。」

後ろで市丸が何か言ったような気がしたが、よく聞こえなかった。まあ、市丸のことなんざどうでもいいか!今は遅刻しないことの方が先決!

◆ 何とか遅刻にならず、教室にはたどり着けた…。

「つだはあ!朝っぱらから疲れたあ!」

「おいおい、遅刻ギリギリなんてHなDVDで夜更かしてもしたか?イツセー。」

「うるせえぞ松田。」

「いや、松田氏。もしかしたらウスィホンかもしれないぞ?」

「うるせえつつてんだろ元浜あ。」

席につくといつもの二人が声をかけてきた…。

「このツツコミのキレの無さは重症だな。ホントに大丈夫か?」

「確かに。ホントにしんどいなら保健室に行けよ?」

「いや、体がだるいのはホントなだけどき、昨日の夕麻ちゃんのデートから記憶が曖昧なんだよ。っていうか、お前らあん時襲い掛かってきたの忘れてねえからな?」

「ん???夕麻って誰のことだ?」

「はあ?」

「というか、今イツセーの口からありえない単語が聞こえなかったか?」

「そうだな、よもやイツセーから『彼女』なんて言葉が出るとは…。ああ!もしかして二次元の方か?」

「いやいや、覚えてねえわけねえだろ?!」

ついつい声を荒げてしまい、周囲の視線が突き刺さる…

「オッホン!ほんつとに、覚えてねえのか?」

「ああ、まあ覚えてないっていうより知らないって感じだけど…何か証拠はないのかよ。例えば写真とか。」

「そう言えばそうだ!あの時何枚か写真を撮ったはず、それを見れば二人とも思い出す……おい待ってくれよ嘘だろ?!」

「おい、どうした?早く出してみるよ。」

「ねえ!どこにもねえ!昨日何枚も撮ったはずなのに…。最初にもらった連絡先まで!」

「いよいよイツセー氏の妄想説が濃厚になってきたな。写真以外にも証人とかいないのか?」

「!!!」

「そうだよそうだよ!いたじゃねえか…あの日当日に会った奴が!!つか、さつき聞こうと思つてたのになんで忘れてたんだよ俺。」

「昨日?ボクは会うてないで?なんせ一日中家におつたわけやし…。」

「何かそれを証明できるものあるか?」

「なんなんアリバイ確かめるとか、自分ら警察かなんかなん?まあええけど…ほら。」

「そう言いつつ市丸は一枚の写真を見せてきた。そこには市丸ん家のリビングと思わ

れる場所のソファでテレビを背にしてカメラに向かってピースしている市丸が映っていた。テレビにも時間が映っており、俺と会っていたはずの時間に撮られたのがわかる。というか……くそつ、無駄にイケメンで腹立つ。

「悪いな、どうしても確認したいことがあつてな。」

「なんや、せつかく見せたのになんで不機嫌になつとんの?」

「別に、ただ面にムカついただけだ。」

『ただ』、で済ませたらあかんと思うんやけど……。」

「ほらな? イッセーの妄想とまでは言わねえけど記憶違いなんじゃねえか? これだけないって証拠があつちやあな。」

「あれ? ボクの発言ノータツチ?」

「そうそう松田氏の言うとおりで。今日はもう帰ろうぜ? んでもって帰ってHなもんでも見れば気持ちも切り替えられるだろ。」

「……………」

「そうだな、今日はもう帰るか。」

やっぱり夕麻ちゃんとのデートは夢だったのか?

イッセー: side out

side: 第三者視点

イツセーたちに軽い取り調べを受けたにもかかわらず、礼の一つも言われないうままガ  
ン無視を連発してくらったギンは柱によりかかりつつ項垂れていた…。そこに近寄る  
生徒が一人：

「もう話は良いのかい?ギン。」

「ええ言うか、向こうに切り上げられたんやけどね?裕斗。どうやらもうええみたい  
や。」

「そつか、ところで…今日が何の日かギンは覚えてるかい?」

「そももちろん。あの日、やる?場所ならもう取つてもろうてるで。」

「相変わらず用意がいいね。じゃあ早速行こうか。」

そろつて教室を出る二人。二人は試合のこと(前話参照)を話したつもりだが、教室  
内では暴風が吹き荒れていた。

「えっ?やっぱりの二人って…。」

「会話だけ見るとマジで付き合つて1ヶ月とかのカップルみたいなんだよなあ。」

「あれで付き合つてないとかマジ?」

「え?突きあつて「ちよつとダメレ」」

そんな話が繰り広げられているとも知らず、木場とギンは剣道部の道場を借りて二人  
とも防具を身に付けず向き合っていた。

「防具を着けようとしてないところを見ると……それ程本気でやってくれると思つていいのかな？」

「まあ、あんなだけ熱烈にせがまれたらなあ。それ相応の対応せな礼儀に反するやろ？」

「フツツ、その対応にはありがとうつて言つておこうかな？」

「まったく……嬉しそうな顔しよつてからに。つとこんだけギャラリーいてるんやから誰か審判役頼めますか？」

「では、剣道部部長の私が。」

「え、部長ズルい。」「私が出ようと思つてたのに……」

「おおきにです。」

「ありがとうございます。」

そう、剣道部の道場を借りているということもあり、二人の周りは剣道部の部員が囲んでいた。いや、よくよく見ると剣道部以外の生徒もちらほらと見えるなんとも耳が早いことだ。この二人は有名人でもあるので当たり前と言えば当たり前だが……。

「ルールは何でもあり、寸止め的一本勝負でいいよね？」

「それでええよ。お互いに剣道やなくて剣術をやつとる身やからその方が色々やりやすいやろ。」

「では、両者ともに準備はよろしいですか？」

「ええです。」

「大丈夫です。」

「では…」

「始め!!」

掛け声とともに二人の姿が掻き消えたと思うとすぐさま中央で激しい鏝迫り合いが起ころ!!

「流石、速いね。」

「そつちこそ。」

(言うてもこれ、本気でやれば押せるな。力的にはボクの方が上なんかな? いや、向こうさんも全力いうわけやないみたい…一般人「?」相手には本来の力は出せんゆうわけか…)

しかし、ギンが思考に一瞬気を取られた隙を木場は見逃すはずもなく、鏝迫り合いから一気にギンを押し返し一転攻勢に出る。木場は袈裟懸け、逆袈裟、胴薙ぎ、などと怒涛の攻めをみせるがギンはそのことごとくを的確に捌いていく。

「簡単に防いでくれるね。」

「いやいや、全然簡単やないよ?」



木場は袈裟懸け、ギンはそれを竹刀を両手で支えた形で再度起こる鏝迫り合い…先程よりもぎちぎち、ギリギリと竹刀から音が上がりそうなほど押し合いが繰り広げられる。そして今回の競り合いに勝ったのは……

ギンであった。

「っ!!」

「足元がお留守やで？」

そのギンの声が聞こえたかと思うと、木場の視界は突如として90度回転した。何が起こったかという…ギンの足払いによって木場の体勢が崩されたのだった。さらに倒れてしまった木場に向ってギンの竹刀が叩き切ろうと迫ってくるが…間一髪、木場は横に転がることで躲し、その勢いで立ち上がり体勢を立て直した。

「まだまだ！」

「ーードンツ!!」

、とバカデカイ踏み込みの音とともにギンが攻め込み木場の反撃を許さない。その苛烈さはギンは竹刀を使っているにもかかわらずまるで槍を使っていると周囲のギャラリに思わせるほどの突きの嵐だった。しかしそんな嵐の中、木場はその突きを逸ら

し、時には弾くことでしのぎ、その顔には焦りなど微塵も感じられない。そんな木場の防戦が続くかと思われたが、

(……)だ!!)

木場は突きの連打の隙間を上手く縫い、切り上げをもつてギンの竹刀を跳ね上げた。その少しの時間に木場は素早くギンの背後に回り込み、胴へと一閃を打ち込もうとする。これで勝負が決まったか?!とギャラリーの全員がそう思ったが、次の瞬間、ギンは弾かれた体勢のまま竹刀を脇の隙間から竹刀を伸ばし、鋭い突きを放つ。木場は寸前にそれに反応し竹刀の腹で突きを受けた衝撃で大きく弾かれたように後退した。今二人がいる位置はこの試合が始まった時丁度お互いがいた位置であった。

「フフツ、本当に楽しいね、ギンとの試合は。」

「でも楽しい時間はいつかは終わるもんや。」

「そうだね。そろそろ決着をつけよう。」

「そこには大賛成や。あんまりヒトの部活場所とるんも悪いしなあ。というか、こつちの体力もそろそろアカンしな……」

「何か言ったかい?」

「いいやなんも?これが最後や……いくで?」

「うん、来いっ!」

両者構えつつ、それと同時に場の空気もより張りつめていく。その終わりは突然に訪れた：二人とも一斉に飛び出しぶつかり合い数合打ち合い、三度激しい押し合いとなつた。

(こつちは割と本気でやつとんのに向こうは力隠しとんのは理由があれど少し癪や。悪いけど本気出してもらうで裕斗?)

(……!!!)

押し合いのさなか、ギンの雰囲気が変わつたと思いきや木場の表情が険しくなり今まで以上の強さでギンが押し負け、弾き飛ばされる。木場は一瞬困惑した顔をしたが、好機を逃すようなことはせず、さらに追い打ちをかけるため一気に詰め寄る。今度はギンに不意を突く隙を与えないためにも最速で、真つ正面から。木場は詰め寄りつつ、少身体勢の崩れているギンと目が合った。いつもと違うギンの少し見開かれた目を見た瞬間木場は、  
ゾクツ

とんでもない寒気に襲われ、ピタつとその足を止めた。当の本人は蛇に全身を締め付けられるような錯覚に陥っていた。その悪寒は木場の勘違いではなく、ことは一瞬だった…。

ギンは押された体勢から自分の竹刀から手を放しつつ一歩前に踏み込み、木場の竹刀

の取手を掴みながら相手の勢いのまま木場を投げ飛ばした。あまりのことに木場は全く受け身を取ることもできず、横になったままギンに竹刀を突き付けられる。

「そこまで!勝者……どっち?」

「まあ、ボクの／僕の負けですね。」

ん?」

「最後に倒れていたのは僕なんだからギンの勝ちだろう?」

「いやいやいや。太刀取りなんて邪道をやつてもうたんやから『剣士』としてボクの負けや。裕斗の勝ちやろ?」

「でも……」

「いや……」

「しかし……」

「……こら平行線やな。審判さん!決めてもろてええですか?」

「うーん……。なら市丸君は反則行為で、木場君は最後の一手という点を考慮して……引き分けてことにしましょう。以上、試合終了。礼!!」

「ありがとうございます。」

「二人ともいい試合をありがとね?部員にもいい刺激になったわ。」

「いえいえ、こちらこそわざわざ場所を貸していただきありがとうございます。」  
「自分からも、審判役共々ありがとうございます。」

試合が終わり、ギンが荷物のまとめ帰りの準備をしていると木場が近づいてきた。

「ギーン？合気をやってるなんて聞いてないんだけど？あと、最後の競り合いの時やってくれたね？」

「ん？そら言つてへんかったからね。太刀取りの件はわかるけど、競り合いの時？ボクはなんもしてへんよ？」

ギンはしらばつくれたが、木場の言う通り、最後の競り合いの時ギンは木場に本来の力を出させるために木場だけに殺気を飛ばしていた。そのため、木場は少々冷静さを欠き、合気で投げられても対応が遅れたのだった。

「今回は勝負がつかなかったけど、今度は絶対に負けないからね？」

「受けて立つ…って言いたいところやけど、できればこんな疲れるんは遠慮したいわ。」

「あはは、ギンならそういうかなって思ってたよ。じゃあまた明日。」

「おう、ほなまた。」

そう言いあつてお互いに道場を後にした。

第三者視点：side out

side：ギン

いやあ強かつた強かつた。まさかあんな速いとは思わんかつた。

しかも本来の力はまだ全開やないときた：向こうが全力で来られたら今度は勝てるか本気でわからんなあ、合気も通用せえへんやろし。因みに今時間はもう夕暮れを越えて夕飯時、ボクは帰宅中なのだが、実は実家から出て父さんの知り合いから特別価格で一軒家を借り、一人暮らしをしている。

「ただいまー…言うても誰も返事h「おや、遅かつたね。おかえりなさいギン。」…：なんでおんの?ヴアーリ。」

一人暮らしのはずの家に帰宅し、扉を開けるとそこには銀髪長髪碧眼の美少女がエプロンを着て立っていた。そう、『美少女』や。原作やと原作主人公兵衛のライバルでかなりの強キャラとして出てきてて、そこでは『男』として描かれていたはずなんやけどなんでもかこの世界では女の子になつてゐるんよなあ。

「なんでって、好いた男の家に女が来るのは変かい?こういうのを『通い妻』って言らしいね。」

「せやね、聞き方が悪かつたわ。どうやって入ってきたん?合鍵なんて渡した覚えはな

いんやけど…。『ピピピピッ』ん？……いやどうやったかは分かったわ。」

ポケットのスマホから音がして見ると、『すいません、止められませんでした』の一文。あの王子様でも止められなかったんならしゃーない。

「とうか、『通い妻』なんて言葉よう知ってたなあ。」

「私が教えたにゃん♪」

「くらら王子さん？くせ者が二人なんて聞いて取らんよ…」

「なんやへタレの野良猫が迷い込んでたみたいやな。保健所さん対応してくれるかいな？」

「ちよつ！へタレとかひどいにゃん!!」

「へタレ言われるん嫌やったらさっさと証拠集めや、黒歌？」

「いや、もうあらかた集め終わつたにゃん…あいつらポンポン情報吐きすぎにゃん。おかげであちこち駆け回る羽目になったにゃん。」

「だから最近見かけんかったんか…なら後はしかるべき場所で明かすだけ…この短い間ですごいゃん。」ポンポン

「いやそんな逆に素直に褒められると照れるにゃ♪」／／／

「で？」

「『で？』って？」

「妹さんにはもう会ったん?」

「……」

黒歌の頭を撫でている手に力を込めて、

「くろくろくか? あんだけボク言わんへんかった? 妹さんに早よ会ってあげな一層疑心は深まるばかりやつて。」ギリギリ

「に”や”ー! ギリギリはやめてにやー!!」

「まったく: 『クイツクイツ』ん?」

「黒歌だけ頭撫でられてズルい。」プクーツ

「(なんやこのかわいい生物は…) はいはい、ご飯作ってくれておおきに。」ナデナデ

「フフフ。あれ? ご飯作ってたって私言ってたっけ?」

「まあこんだけええ匂いさせとればね? それに今着けとるそれ、ボクがよう使うてるエプロンやよ?」

「ああ、悪いけど勝手に使わせてもらったよ。そうか、ギンが良く使っていたのか: 道理で君の匂いがすると思っただよ。」

「さらつと変態じみた発言せんで? そんなボク匂う?」

「いや、そんなことはないさ。いい匂いだよ? ところで: : : その黒歌はいいのかい? なんだか痙攣しているけれど。」



「おっと、忘れてた。」パツ

「にやんのこれしき。愛の鞭と思えばなんのそのにや。」

「はいはい、バカなことやってないでさっさとリビング行くで？折角ヴァーリが作ってくれたんが冷めてまう。」

く少年少女、食事中く

「「ごちそうさまでした。」」

「ほんまに美味しかった。また料理の腕上げたんやない？」

「確かに。今までのラーメン狂いのヴァーリとは思えないメニューだったにや。まさかあのヴァーリからバランスのいい食事が出てくるなんて…やっぱりギンの説教が聞いたのかにや？」

そう、今日の献立は『生姜焼き・ワカメのサラダ・みそ汁・ご飯』というものやった。そして以前ヴァーリの食生活を聞いたときにあまりにもラーメン、ラーメン、ラーメンばっかりと酷すぎたため、割と本気で叱ったんやったつけ。

「で？今日はどうしたんだい？ギンがあんな遅い時間に帰ってくるなんて珍しいじゃないか。」

「帰宅時間が把握されてんのは突つ込まへんけど…。ちよつとした野暮用やよ。」

「ふむ…体のあちこちに見える擦り傷や内出血を見ると一試合した感じかな？」

「うん、鋭すぎて少し引くわ。ちよつとの情報から推測するにしても的確過ぎやわ。」  
「なるほど、どうやら合ってるみたいだね。だとしたらその相手には嫉妬してしまうな。」

「いやいや殺し殺されのガチなやつやなくてフツーに競技的な試合やから…。」

「相変わらずヴァーリは戦闘狂なのにや〜。」

「ピリッ!」

「ん?」「ほう…」「にやつ!」

「どこかのバカが悪さをしてるみたいだね。」

「しかも、これ光の力つてことは墮天使の可能性が高いにやん。つてどうかしたのかにや、ギン?」

「…ちよつとこれはまずいなあ。…ちよつと出てくるわ。ベッドとか自由に使うてええから早う寝とき、夜更かしは美容の敵やよ?…折角の別嬪さん、損なつたらもつたいないで?ほな、行つてきます。」

こら急がな。間に合わん、なんてなつたらしやれならん!少し焦りつつ、家を飛び出した。

「ねえヴァーリ?」

「なんない黒歌?」

「ギンってああいうところズルいわよね。」

「おいおい、顔が真っ赤だぞ?それにいつもの猫語尾も抜けてるじゃないか。」

「鏡を見て言いなさい、あんただってトマト色じゃないのよ。」

ギンが家を出た後そんな会話があつたとかなかつたとか…

ギン: side out

〜時は少々遡り…

side: イツセー

今は21時過ぎ…やっぱりなんだか体の調子がおかしい。まず視界。今は夜のはずなのに夜目が利く、なんていうレベルじゃないくらいによく見えている。次に体。朝あんなに体が重くてだるかつたはずなのに今は嘘のように体が軽い。昨日の記憶といい、何だつてんだよ…。

「だーめだ、どうにも気分が晴れねえ。ちよつと散歩にでも出るか…。」

どうにも心のモヤが晴れないため物理的に気分を変えていこう。

◆ 特に目的地も決めずに歩いていたら、気が付けば夕麻ちゃんに刺されたあの公園に来

ていた。

「やっぱり、記憶違いとかじゃないよな。」

噴水の前でたたずんでいると一人誰かこちらに近づいてくるのが見えた。

「ほう、こんなところにいるとは…主人はどうした?それともはぐれか?まあどちらでもいいか。」

「えーつと…すみません、どちら様で?」

「む、私の正体もわからぬか…。なりたてなのか?それともこちらを油断させようとしているのか…。どちらでも貴様を殺すことには変わりないのだがな。」

トレンチコートの男は物騒なことを言いつつ右手にはいつか見た光の槍が握られていた。

「!!…それは?!」

「ほう、光の槍はわかるようだな。ならば余計にここから生かして返すことは……できん!!」

男から途轍もない殺気を放たれたかと思うと次の瞬間、男は目前まで迫ってきていた。

「うおっ!!」

下がろうとしたが石かなにかに躓いて尻もちをついてしまった。しかしそれが功を

奏したようで今、俺の頭上を槍が通過していた。オイコラ！毛何本か持つてかれたぞ？！（なんて言ってる場合じゃねえ！早く逃げねえと!!）

男に背を向け脱兎のごとく駆け出した。

くそして時は戻って現在く

「はあ、はあ、はあ…くつそなんで振り切れねえんだよ…。」

住宅街を全力で走っているのに男との距離が一向に離れない気配がない…男はずつと歩いていくだけにもかかわらず

「何かしてくるかと思えば何もせず、ただ逃げるだけか…どうやら勘繰りすぎたようだな。よもや結界にも気づかぬとは——」

後ろからの声が突然途切れたかと思うと…

「もう貴様に用はない。死ぬ」

後ろにいたはずの男がいつの間にか前方から襲い掛かってきた?!どうにか体を捻り、光の槍の一突きを躲すが、ブロック塀を背にした俺にもう逃げ場などなかった…

「があ!!」

槍が俺の身体を貫通し、後ろのブロック塀に突き刺さる。槍は俺の身体を焼いているようで、辺りに人の焼ける嫌な臭いが充満した。

（熱い、あつい、アツい、アツイ!!）

刺される痛みと別に焼ける痛みによつて声も出せない。あまりの痛さに意識も飛びかけ朦朧とした状態の中、死を覚悟したが…ふと、俺に刺さっていたはずの槍が目の前の男とともに消失した。

「なんや、危ないとこやつたなあ?兵藤君?」

「ゴホツゴホツ。なんでお前がいるんだよ……市丸ギン。」

イツセー:side out

side:第三者視点

イツセーの目の前にいたのは市丸ギンであつた。

「それ、朝も似たようなん聞いたなあ。ただの散歩やよ?」

「散歩つて…つて!ンなこと言つてる場合じゃねえ!早く逃げろ、殺されるぞ!!」

「なに心配してくれるん?ボク、君に嫌われとる思うてたけど、兵藤君は優しいんやね?」

でも…僕が逃げてもうたら君、殺されるやろ?それに、流石に(見殺しするんも)二度はゴメンや。」

「(二度目?)俺のことはいいからほっとけ!死にてえのか?!」

「心配おおきに。でも逃げへんのは変わらへんよ?兵藤君は知らんと思うけどボク、強いから。」

そうこうしているうちに、男がイツセーたちの前に現れた。所々焦げている部分があ

るあたり、どうやらギンに攻撃されたようだ。

「貴様、普通の人間は結界で近寄れないはず…どうやって入ってきた。」

「んー？結界？そんなんボク知らんで？途中でちやちな紙切れはあつたけど…もしかしてあんなもんを結界言うとするん？冗談やろ？」

「貴様あ…！」

「おい市丸!?!なに怒らせること言ってるんだよ!?!」

「まあまあ、見とき。」

明らかに怒っている様子の男が一步踏み出した瞬間、その足元から大爆発が起こった。

「なっ!」

「うんうん。やつぱり『曲光』と『伏火』、『赤火砲』の組み合わせは使えるな。」

爆風から顔を庇いつつ驚くイッセーとどこか満足気なギン。しかし、そんな爆発の中男は出てきた。その表情から明らかに先程の怒りは全くと言っていいほど見られず、冷静にこちらを観察していた。

「あらら、あんまし効いてない感じ？」

「いや、矮小な人間の術にしては効いたぞ。先程の爆発…俺を最初に飛ばした時に仕込んでいたのか？」

「はて?どうやろな?」

「答えぬか…。まあいい、まだあったとしてもそれを想定して動けばいいだけのこと。」

「っ!!」

「ぐえっ!?!」

ギンがイツセーの襟首をつかみ、引きずるように下がった。二人がさつきまでいた場所には光の槍が2本突き刺さっていた。

「…どうやら仕込めたのは先の一発だけだったようだな。」

「」

「ほんま無茶苦茶やな…もしほんまに何発もあつたらどないする気や。あと兵藤君、いつまで呆けとるん?腰抜かしとる場合ちやうで?」

「たかが人の術で私が死ぬわけもない。…だがどうやらここまでのようだ。」

「…ふう、思ったよりも時間かかったみたいやなあ。」

「そうね。これ以上私の眷属をイジめるのはよしてもらおうかしら。」



戦場に緋色が降り立つ。そこに姿を現したのは駒王学園3年の『リアス・グレモリー』その人であった。

「よくも私の眷属に手を出してくれたわね。墮天使さん？これ以上やるといふのなら本気で全面戦争になりかねないわよ？」

「いやいや、こちらとしてははぐれを善意で消しておこうと思っただけなのだがね…。今度から誰の者かわかりやすいように名札でもつけておくといい。今日のところは退くでしょう。」

「待ちなさ」私のことを追うのもいいが、その場合貴様の眷属はどうなるかな？」ツチ!!」

男は背中から黒い翼を生やし、その場から離脱していく…。

敵も去り、一息ついたところでドサツとギンたちの後ろから音が聞こえた。それはイツセーが倒れた音であった。

「っ!!イツセー!?!」

「…大丈夫。どうやら氣い失つてるだけみたいです。敵もおらんったから安心したんやないですかね？」

ギンは素早く駆け寄り、脈や軽い触診をしたところ氣絶をしただけのようだ。ただ、とギンは続けて…

「ボク治療系には疎いんで、グレモリー先輩頼めますか？」

「あ、貴方も貴方であんまり動揺してないのね…。問い詰められるものだと思つていただけ。」

「いやまあこんな時こそ冷静にならなあかんでしょ。それにもう夜も更けてもうてますし…。後日先輩から説明もしてくれはるんやないですか?」

「ええ、そのつもりだから明日私の使いを送るわ。」

「わかりました。改めて、兵藤君の治療の方頼んでええですか?」

「勿論、私の眷属だもの。自分の眷属の面倒は自分で見るわ。」

そう言いつつ、イツセーを肩に担ぐリアス。

「ほな、リアス先輩また明日。」

「ええ、また明日。イツセーについてはこちらに任せなさい。」

「それじゃ「市丸君!」…はい。」

「遅くなつたけど、私の眷属のことを守ってくれてありがとう。礼を言うわ。」

「いえいえ、言うてほとんど役に立てへんかつたんで。それに、先輩がもう少し遅れてたらボクも殺されてたと思ひますし…。」

「あらそう? 私はそうは思わないけど? だつて貴方見たところまだぜん「先輩。早よせな兵藤君のケガもつと酷なりますよ? 後遺症でも残つてたらえらいことですし。」そうね。今日のところはそういうことにしといてあげる。」

そう言つてリアスはコウモリのような翼を背中から生やし、飛んで行つた。

『今日のところは』ねえ……。あんま突かんでほしいんやけどなあ。』

そうぼやきながらもギンは帰路についた。

◆  
おまけ

「好きに使うてええとは言うたけど、流石にソファアで寝られるんは気が引けるわ。」

ギンの目の前にはソファアで横になっている二人。ヴァーリと黒歌しやあないなあ、と呟いたギン

はそつと起こさないようにヴァーリ、黒歌の順に二階の空いている寝室へと運んで行つた……

お姫様抱っこで。

「お休み。ええ夢を。」

運び終えた後そう言いながらギンはそつと扉を閉めた。その時、二人の顔が少し赤みがかつて見えたのは気のせいだろう。

結構重めのCO（カミングアウト）のはずなんやけどちよつと軽すぎひん？

side：第三者視点

リアス・グレモリーとの接触した翌日。

コトコト

ソファアで寝ていたギンはそんな音ともに目を覚ます。

「ん、ん〜？」

「あ、起きたかにや？おはよう、ギン。」

「おはようさん、くろか。あさごはんつくつてくれたん？おおきに。」

「にやはは。寝起きでギンがフニヤフニヤだにやく。おはようのキスでもするかにや？」

「…かお。」

「顔？」

「かお、あろうてくるわ。」

「にやく！おはようのキスは無視かにや!？」

「嘆く黒歌をガン無視してそそくさと洗面所に向かうギン。何かとマイペースである。」

「むー!」

「何をむくれているんだい黒歌?」

「にやー、ギンがつれないのにや。」

「なんだい、いつものことじゃないか。」

「まあそうにやんだけど…つと、ヴァーリおはy」

「おはよう黒歌。私の顔に何かついてるかい?」

「…ヴァーリ、悪い事は言わないからこつち座りなさい。」

「???」

「寝癖、ひどいわよ?」

「…お願いしよう。」

すると、ギンがリビングに戻ってきた。

「やあ、おはようギン。」

「うん、おはようさん。ヴァーリ。こうして見るとなんや姉妹みたいやね。」

「ほう、因みにどちらが妹かな?」

「…そら／そりやヴァーリやろ／よ。」

「むう。」

「流石に現役でお姉ちゃんやってる黒歌には勝てへんやろ…。」

「ヴァーリは昔から身だしなみを疎かにしがちだから困るにや。」

困ると言う割には黒歌の顔にはどこか満更でもなくどこか嬉しそだった。

「今日の黒歌はなんだか機嫌がいいな。」

「まあね。なんせ今朝は珍しいギンの寝顔が見れたからにや。」

「な!?!ズルいぞ黒歌!」

「フフン。早起きは三文の徳とはよく言ったもんにや!」

「ぐぬぬぬ…。」

なぜ、この二人がギンの寝顔でこんなにも盛り上がっているのかというところ…。ギンは人前で寝ることはあんまりない。両親からの英才教育鬼しごきによって誰かが近づこうとするとそれがそれなりに信頼している人でない限り、たとえ眠っていても起きてしまうのだ。ある意味ギンからの信頼の形が表に現れる瞬間である。まあ今回は昨夜の墮天使との交戦の疲れも原因ではあるのだが、それでもギンの寝顔はそれほどにレアなのだ。

「まあまあ、そんなにやに残念がらなくても写真に撮ってるからあとで送ってあげるにや

♪

「ほんとか黒歌!?!ぜひ頼む。」

「二人とも聞こえとるで。黒歌、肖像権侵害やで?写真の削除を申し渡す。」

「嫌にや♪」

「：しゃあないな。妹さんにお姉ちゃん盗撮する犯罪者やった言うとくわ。」

「にや!?!それは卑怯にや!」

「ギン。」

「ダメや。」

「どうしてもかい?」

「どうしてもや。」

「ギン。」

「しつこいでヴァー……り。」

そこには上目遣いでギンをじっと見て懇願しているかわい<sup>ヴァー</sup>い生物<sup>リ</sup>がいた。

「……そんな顔してもダメ。」

「なんにやその間は。」

「惜しい、あともう少しか。」

「兎に角、ダメなもんはダメや。」

「じゃ、じゃあ!私はヴァーリにしか渡さないから!絶対にそれ以外には見せもしないし、渡さないって条件はどうにや?」

「うーん、それならええん……かな?」

「やったー！」

「決まりにやー！じゃあこの話はここまで！ほらほら朝ごはんが冷める前に食べるにや。」

（黒歌が条件まで出すんやったら、そこまで大事にもならへんやろ。ただ、）

「せやね、黒歌がそこまで言うんやったらボクも妥協しよか。…でももし、それを破った場合黒歌の妹さんに今までの君の恥ずかしエピソード言うたるからな？」

「にやにやにや!?ちよ、ちよつと待つにやギン!!」

「さーて、ヴァーリ。折角黒歌が作ってくれた朝ごはんや、早よ食べよか？」

食事の準備を着々と進めていくギンとヴァーリ。そしてその後ろで『ぎにやー!!』と悲鳴を上げながら悶絶している黒歌を無視してあつという間に準備は終わった。

「「いただきます。」」

色々と話しながらも食事は進んでいきあらかた食べ終わった頃、話題は昨日の事へと移っていった。

「で、結局昨日はどうなったの？」

「やっぱ暴れてたんは墮天使やったわ。そこんこはどなん？」

「ふむ…そんな話は聞いてないな。完全にそいつらの暴走だね。」

「あー。…総督さんに文句頼むわ。」

「うん、任された。」



「あ！そう言えばギン、墮天使以外にも昨日会ったでしょ？」

「ん？ああ、リアス先輩やね。」

「それ、大丈夫だったにや？」

どうしても黒歌はその過去から悪魔に対してはやはりいい印象は持てないようだ。

「大丈夫やと思うで？グレモリー家はそない悪い話聞かへんし、それに実際に会うて話した感じ、悪い人ではないみたいや。」

「ふーん。まあギンが言うならいいんだけど…。」

「ところで…ギン。時間はいいのかい？」

「げ、そろそろ出なアカンな。さっさと準備せなね…こちそうさんでした。黒歌、かなり美味しかったで？」

「うん、お粗末様にや。食器については任せてにやん。」

「私も手伝おう黒歌。」

「助かるにや♪」

流し台まで食器を持って行ったギンはお礼を言いつつ、自分の部屋へ登校の準備しに行った。

「ほな、行ってきます。」

「はい、行つてらっしゃいにや！鍵はいつもの所に入れとくから安心するにや。」

「…それはええんやけど、勝手に漁らんでよ？」

「保障しかねるにや！」

「堂々と言わんで欲しいわあ…。ほんまに妹さんに言いつけよかな？」

「それだけは勘弁してほしいにや!!」

「なら、せえへんつて約束できる？」

「………するにや。」

「私も見張つておくから安心して行くといい。」

「ヴァーリもどちらかと言うとそつち黒歌側側なんやけど…。」

「それよりも。今日グレモリー嬢と会うんだろう？ギンに限って万が一もないだろうけど気を付けてね？」

「ん、それもちろんやけど…。ヴァーリ頼むから黒歌しつかり止めてな？」

「私そんな信用無い？」

「自分の胸に手を当てる考えなさい。…ふう、ほな行つてきます。」

「行つてらっしゃい。」

ギンは少し頬を緩めて玄関を出た。

第三者視点：side out

◆  
side:ギン

時間はあつという間に過ぎ、気付けば放課後…。

「ギン。リアス部長から君たちの案内を頼まれたんだ。ついて来てくれるかい？」

「ん、りよーかい。」

「驚かないんだね？」

「…なんとなく気がついてはおったよ、裕斗。」

「へえ。」

「ほらほら、もう一人連れてかなアカンのやろ？早よ行かん？」

「そうだね。一誠君の方も迎えに行こうか。」

そう言つて、裕斗と一緒に兵藤君のいる教室へと向かうと…。

「ねえねえ、あれつて…。」

「金王子の木場様に銀王子の市丸様じゃない!？」

「別クラスの二人がうちのクラスに何の用だろう?。」

「有名人は大変やねえ。金王子?。」

「他人事じやないよ？ 銀王子。」

「まあ冗談はさておいて兵藤君呼ばな。」

「そうだね。ちよつとすいません。」

「はっ！はい!!」

「兵藤一誠君はいますか？」

ーザワザワー

「えっ?!あの変態兵藤に!?!」

「いったいどんな用だろう？」

「市丸様もいるってことは先週みたいに兵藤が何かやったとか？」

「でもそれじゃあ木場様がいるのはなんで？」

「おう、木場。呼んだかよ。って市丸もいるってことは…。」

「うん。リアス部長の遣いだよ。」

「分かった。すぐ準備するからちよつと待ってろ。」

◆

「準備できたぞ。」

「これからどこ行くん？」

「そう言えば、どこに行くか言ってなかったね。今から行くのは旧校舎。僕たち『オカル

ト研究部』のあるところさ。」

「で、いつツツコミ入れようか思うたんやけど…。どしたんその顔。」

今裕斗と兵藤君の三人でリアス先輩のもとに向っているのだがその兵藤君が何故かボロボロなんよなあ。例えるなら顔面ア○パ○マンレベルで。昨日の傷とはまた別件やと思うけど…。

「あ、ああこれか？ そうだ！ 聞いて驚け市丸!!」

「なになに急に勢いづいて。」

「今朝なあ、起きた時に隣に誰がいたとおm「リアス先輩やろ？」…まあそうなんだが、なんと裸だったんだよ！ お互いに!!」 ドヤア

「いや、そんな『羨ましいだろ!!』って顔されても困るんやけど…。」

「なん…だと…。市丸、お前まさかその年で枯れてんのか？ 他に言うことねえのかよ?!」

「一線超えるんやったらバレへんようにな?」

「違う! そうじゃねえ!!」

「ていうか、不名誉なこと言わんといてや? 誰も枯れてなんかないわ。でも、君のその傷

の理由分かったわ、そのことあ元浜と松田の二人に言うたやろ？」

「おまつ！なんでわかった?！」

「そら君の事やから自慢するんはわかりきつとるし、する相手と言ったらあの二人しかおらへんやろ?…そう言えば今朝なんやリアス先輩が男子と一緒に登校して来たはつたつて騒がれとつたけどあれ、君か。」

「二人とも、着いたよ。」

駄弁っているうちに旧校舎についたようだ。

「ここつて…。」

「旧校舎やね、都市伝説や七不思議とかでも有名やけど…、ここ人が出入りできたんな。」

「失礼します。二人を連れてきました。」

『オカルト研究部』の看板がかかったドアを開け、目の前に広がるは一言で言えば異質。部屋は薄暗く、なんとというかオカルトと言ったらこれ!というような儀式に使うようなグッズが色々と置いてあつた。

「うわあ。」

「なんや『ザ・オカルト!!』つてな感じやなあ。…ん?」

ふと、ソファーに座りお菓子をパクパクと食べている白髪ショートカットの少女に目

が行った。

「ああ、彼女は『塔城小猫』とうじょうこねこさん。僕たちの一つ下だよ。」

「どうも。」

「『塔城小猫』ちゃんと言えば！駒王学園内でもトップレベルの可愛さで駒王学園のマスケットキャラクターとも呼ばれるレベルのカワイ子ちゃんじゃねえか!!まさかオカルト研究部に入っていたとは…。」

「相変わらず、そういった情報にはえらい強いんやな…兵藤君は…。」

そう言うときまたお菓子を食べるのを再開した。よう食うなあ。

「?あげませんよ?」

「いや、おなか一杯やから大丈夫。別に取らへんよ。ところで裕斗、こん子もやつぱり?」

「それについても部長からお話があると思うよ。」

「りよーかい。」

じつと見てしまったため何か勘違いを与えてしまったようだが、その塔城さんがまだこちらを見ていた。

「ボクになんかついてます?」

「いえ、ただ…。」

と言って食べるのを中断した塔城さんはすつとこちらに寄ってきて、

「おや?」

「な!!」

すんすん、と服の匂いを嗅いできたのだった。…ん? ちよつと待つて? な、なにが起きてるんや!!

「え、えくと…。と、塔城さん? ボクそんな匂います?」

「?! い、いえ!! すいません突然。なんだか懐かしい匂いがしたのでつい。」

「い・ち・ま・るー!! またお前はなんて羨ましい!!」

「あらあら、なにやら面白いことになってますね。」

そこに、ボク、兵藤君、裕斗、塔城さん以外の声が響いた。

「こんにちは、遅くなりました姫島先輩。」

「いえいえ、木場君。こちらも少し説明を始めるのに時間がかかりそうなので構いませんよ。」

「うおおおお。まさかの二大お姉様の一人、『姫島朱乃先輩!!』」

「あれ? リアス先輩が見当たらないんですが。」

「すいません、リアスは実は…」

そう言いつつカーテンから出てくるのは濡れ羽色の髪を後ろで束ねた『ひめじまあけの姫島朱乃先



輩』。そのすぐ後ろではなにやらシャワーの音が流れてきた。

「実は昨日かなり疲れたようで、今身だしなみを整えているところなのです。なので少々お待ちください。」

「なら、それまで自分は外で待っておきますさかい準備が整い次第呼んどってください。」

「あらあら、よろしいんですか?」

「おいおい、市丸。もったいないぜ?あのリアス先輩の裸が布一枚隔てた先にあるのに、漢としてお前は何も感じないのかよ?」

先程よりもボルテージが明らかに上がった兵藤君がまくしたてる。

「いや、兵藤君こそ何言うてるん。女性がお風呂に入つとんのに男が同じ部屋におるんは倫理的にどうなん?百歩譲って付き合いのある裕斗はいいとして、僕や君がおつたら気も休まらんやろ。まあ、ボクが勝手に出るだけやから君に強制するつもりもないんやけどね。」

「むう、市丸の言うことも一理あるか:俺も出たほうがいいですかね?」

「一応部長の方からは居ても構わないそうですが:」

「お言葉に甘えさせていただきます!!」

「君もブレへんねえ。」

「いやらしい顔。」

唐突な辛辣な言葉。発せられた方向を見ると、そこにはお菓子を食べる少女が…。これにはボクも裕斗も苦笑い。案外言葉の切れ味鋭いんやね。

「なら僕はギンについていくよ。お客さんだし何かあつたら大変だしね？」

「では木場君、頼んでいいですか？」

「はい、任せてください。」

そう言つて二人して部屋から出た。

◆  
しばらくして、中から声が掛けられ、二人は中へと戻つていった。

「どうぞ、座つて頂戴。」

机には人数分のお茶が置かれており、リアス先輩と対面する形でボクと兵藤君が並んで座つた。

「失礼します。」

「さて、どこから話せばいいのかしら？」

「どこからと言われても…昨日の事とかもう何がなにやら…。現実味があまりにもなさ過ぎて…。」

「そうね、そのことを話すなら私たちのことも話した方がいいわね。私たちはね…『悪

魔』なの。」

「は？」

「ちよつと待つてください!! 悪魔? 何かの冗談ですか?」

『天野夕麻』

「つ!!」

その一言に兵藤君に明らかな動揺が見えた。

「…先輩、冗談がキツイですよ。あんまりそれ、聞きたくないです。面白い話でもないですし。」

「あら? 知りたくないの? なんであの日あなたが襲われたのか、なんで皆その女の子のことを忘れているのか。」

「ぐっ…」

「先輩、あんまイジメんとってください。早よ話進めましょ。」

「それもそうね。結論から言うわ: イッセー、貴方を襲ったのは『堕天使』と呼ばれる奴らよ。天野夕麻を含めてね。」

それからリアス先輩はつらつらと説明していった。堕天使について。天野夕麻のこと。そしてそれに関する記憶処置について。だが、イッセーは中々納得はしてへんよう  
で…

「いやいやいや！それらが本当である証拠はどこですか?!言っちゃあアレですけど、人の古傷抉っておいて、何か明確な証拠がなきゃしまいには本気で起こりますよ!」

「私たちが天野夕麻のことを覚えていることが証拠にはならないかしら?」

「…できれば目に見える形がいいです。」

「そうねえ…。まずは私たちが悪魔であることから証明しましょうか…。」

少し悩んだ様子を見せた先輩は制服をちよつとはだけさせると、バサツ!つとその背中からコウモリのような翼が飛び出した。しかも、様子が変わったのはリアス先輩だけやない。

「なっ!木場や小猫ちゃんまで!」

「…。」

「これで信じてくれたかしら?それに、ここにいる悪魔は私たちだけじゃないわよ?」

そう先輩が言うともものすごいスピードで兵藤君がこちらを振り返って見ていた。

「?ああ、ギンは違うわよ?…貴方よ貴方、貴方も悪魔なのよ…イツセー。まあ正確に言う『転生悪魔』になつてもらつただけだ。」

違和感とかなかつた?と聞くと彼の表情が驚きに染まる

「なにやら思い当たる節があるみたいね?そこで、イツセーが襲あわれた日日のことになるのだけど…」

そこからは原作通りの説明が行われた。

先輩が来た時にはもう致命傷であり、助けるために『悪魔の駒』（イーヴィル・ピース）を使つて悪魔にしたこと。そうした悪魔は転生悪魔と呼ばれること等…。

「(ト)まではいいかしら?」

「実感は沸きませんが、なんとなくはわかりました。でも、なんで俺が墮天使?でしたっけ?に襲われるんですか?こう言っちゃあれですけど、俺一般人ですよ?」

「そうね、そのことも説明しときましようか。イツセー、貴方襲われたとき何か言われなかったかしら?」

「ええ?ちよつと思ひ出すんで少し待つてください。ムムム……。」

唸る兵藤君からふと「あ、」と声漏れた。

「もしかして、セイなんちゃらつてやつですか?」

「フフ、正解。それが貴方が襲われた原因でしょうね。貴方が襲われた原因になつたものは『神器』（セイクリッド・ギア）と呼ばれるものよ。」

「そう!セイクリッド・ギア!!セイクリッド・ギアだ!確かに言つてました!」

『<sup>セイクリッド・ギア</sup>神器』は聖書の神が作り出したという強大な力を持つ武器や道具などのことを指すの。そしてそれらは特殊な反応を持っていて、イツセーが襲われたのはこれを墮天使が感知したからでしょうね。」

因みに、ボクの持つ斬魄刀『神槍』は斬魄刀を無理やりこの世界の神器として押し込んだ形やから、そういった反応もほとんどなく、少し隠すだけで感知できなくなるみたいやね。なんせこの距離同じ部屋におってもでも気付く様子もないし…。因みに、隠し方は仙術使いの黒歌のお墨付きや。

「??、でも俺はそんなの持っていないよ？」

「大抵の神器はその所有者の中に隠れているの。そうね…イツセー、貴方が一番強いと思うものを想像して頂戴。」

そう言われた兵藤君は目を閉じ、しばらくすると突然…

「ドラグソ波!!」

……

「う、うん…思い浮かべるだけで、別に叫ぶ必要はなかったのよ?」

「……っ!……っ!……っ!」

「っ、つい…って笑いすぎだぞ市丸ウ!!」

アカンアカン、笑いすぎた。腹痛すぎる。しかし、叫んだ甲斐があったか彼の腕には籠手が装備されていた。

『龍の手』（トウワイズ・クリティカル）。能力は所有者の力を2倍にする。シンプルな能力ね。」

「おおー……おお？」

「まあ、イツセーのことについてはこんなところかしら。さて、改めて：兵藤一誠君、市丸ギン君。この度は私の管理不行き届きにより、二人に多大な迷惑をかけたこと、グレモリーの名においてここに謝罪します。」

そう言うとりアス先輩だけでなく、ここに居るボクと兵藤君以外の全員が一斉に頭を下げた。

「いや、いやいや！頭を上げてください！別に俺たちは気にしてませんから！！な、なあ？市丸？」

「…兵藤君には悪いけど、君みたいに気にせえへんのは無理や。」

「な!？」

「でも、事後の対応の丁寧さ…そして兵藤君の処置も鑑みて、先輩たちの謝罪を受け入れます。」

「お前は!!先輩に助けてもらって置いてなんだよその態度は!!」

ボクの態度に腹が立ったんか兵藤君が胸ぐらを掴み上げる。制服が伸びるから勘弁してほしいんやけど…

「兵藤君はさっきの先輩の話で理解せえへんかったん？ボクらは巻き込まれたんよ。それに、兵藤君こそ何考えてるん？君、『人間』じゃなくなってもうたんよ？親御さんたち

にそれなんて説明するん？」

「そ、それは…」

「親御さんが亡くなるまで秘密にするん？いくらなんでも無理あるやろそれは。」

…とまあ建前はここまでや。」

「は？」

「勘違いせえへんでほしいんやけど、ボクは別に先輩のこと許さへんって言うてるわけやないで？というかさっきの先輩の言葉思い出してみたい。なんで改まって畏まった謝罪したと思う？しかもわざわざ『グレモリーの名において』なんて仰々しい前振りまでつけて…。考えるに、先輩は悪魔業界でそこそこの地位、もしくは権力を持つ立場なやろう。それも踏まえての謝罪いうことは、この問題はなあなあで済ますわけにもいかんいうこと。それやったらこちらもちやんとした対応せな先輩の立場がなくなってしまう。やからこそそのあの返答や。…わかつたら、こん手え離してほしいんやけど。ええ加減苦しなってきたし…。」

「わ、悪い！それとスマン。市丸がそこまで考えてるなんて思ってた。」

「別にええよ気にせんで。そこまで怒れるんは君の優しさ故やろうし…。何よりそれは



君の美点や。ただ、少しケンカっ早いんは直さなあかんで？」

「やつぱり気になるわね、その年でそこまで頭の回転が早いのはかなり珍しいと思うのだけれど…。色々と聞かせてもらえないかしら？あなたの事を。ギン？」

「先輩の反応からして察してましたけど、やつぱり聞いてないみたいですね。それやつたら、まずはボクの家柄から話しましょうか。」

と言つても割と簡単に済む話なんですけど、ボクの家は退魔系の家でした。おおつと、そない身構えんでください。『でした』。過去形です。貴女方悪魔を滅する気いも毛頭ないんで。そういうわけで、人よりもそういつたものに対する感知能力が高いんです。なんで、あの場にも居合わせる事ができましたし、両親から護身術の稽古もつけてもらつてたんで少しは動ける言うだけの話です。

「つとまあ、ボクについてはこんな感じですかね。」

「俺を助けてくれた時の変な術つてお前ん家の奴だったのか…。」

「貴方の出自はわかったわ。それと聞いておきたいのだけれど、私たちが悪魔だつてこととは…」

「前々から気づいてましたよ？」

「もしかして、ギン。昨日の試合の時の寒気つて…」（前話参照）

「ああ、裕斗アレなあ…。こっちは全力でやってんのに向こうは違うなんて腹立つやん？っていうお子様じみたボクなりの我がままよ。」

「やっぱり、どうりで反応が薄いわけね。さて、あらかた話し終えたわけだけど…。そう言えばイツセー。」

と先輩はゴソゴソと一枚のチラシを机に出した。そこには『願い事、叶えます。』と書かれた如何にも宗教勧誘に使われそうな怪しげなチラシであった。

「これに見覚えはないかしら？」

「なんですか、これ？」

「やっぱりわからないのね…。これは私たち悪魔を呼び出すために使われる媒体。ほら、裏に陣が描かれているでしょ？あの日私が貴方のもとに来たのはこの紙のおかげなの。本当に覚えはないのね？」

「はい」

「ということとは一体誰が…」

「ああ、それボクですわね。」

「そう、ギンが…。」

「そうか、市丸が…。」

「って、貴方が／お前が?!」

「いや、兵藤君に関しては覚えとるやろ？あの日の昼に会ったやん。そんな時に入れさせてもらいました。で、そのことで兵藤君には謝らなあかんことがあるよ。ボクは君のことを見殺しにしたんやから。」

「はあ？」

「言うたやろ？ボクは家柄、感知能力が高いって…だからあん時に天野夕麻が墮天使やって気付いてたんよ。」

「あの時って…ああ！もしかしてシールはがしてもらった時か!？」

「そうそう、リアス先輩たちのことは知ったからね。兵藤君には悪いけど、面倒ごとは勘弁したかったんよ。でも、知り合いが殺されるのも目覚めが悪いからってことで仕込ませてもらうたわけなんやけど。まあこうは言ってもただの言い訳や。君を見殺しにしたことに変わりない、何されても文句は言えへんよ。」

「いや、そんなことする気ねえよ。」

「いやでも、」

「でももストもねえの！今俺は生きてるからいいんだよ。そもそも、お前がチラシ入れてくれなきゃ死んでたんだし…。それでもお前が気にするんだったら、昨日助けてくれた分でチャラだ！いいですよ、先輩。」

「そうね、プラスマイナスで言えば、イツセーの言う通りだと思っわ。それに、私からす

れば不謹慎だけど新しい眷属を得られる切っ掛けになったわけだしね。なにより、本人がこう言っているんだからそれを尊重したら？」

「そう言われたら、ぐうの音も出ないんですが…。」

「さて、話したいことは大方話し終えたかしら？」

「部長、勧誘の話がまだです。」

「つとと、そうだったそうだった。一番大事なことを忘れてたわ。ありがとう朱乃。」

「勧誘？」

「そう。ギン、貴方の身体能力やその退魔の術を見込んで誘うんだけど、貴方も悪魔になつてみない？まだ『悪魔の駒』は残っているのよ。」

「そう言う先輩の手には黒のチェスの駒が浮いていた。うーん。確かに純粋な身体能力の向上と、長い寿命も魅力的なんやけどなあ…。」

「お誘いは大変ありがたいですけど、今は丁重にお断りさせていただきます。」

「理由を聞いても？」

「正直言うとそのない大層な理由やないんですけど、簡単に言えばボクはまだ人間でいたいからです。それに、兵藤君を致命傷から持ち直した回復力を見ると、とつといた方がええでしょ。もしボクが死にかけてて、尚且つ駒も残つてて、そんな時に先輩の気が変わつてへんかったら使うてくれてもかいませんよ？」

「そう、なら悪魔への勧誘は今のところは諦めるしかないみたいね。それなら一応『オカルト研究部』の方には入ってもらえるかしら？ そうすれば何かあった時に守れるから。」

「なるほど、後ろ盾ですか……。確かにそれだったらボクとしても助かりますね。」

「!!なら!」

「ええ、喜んで入らせていただきます。」

「よっし!!」

「リアス。はしたないですよ。」

「いいじゃない朱乃。裕斗の友達が入ってくれるのよ？ 喜ばしい事じゃない。それにこれまでの堅苦しい空気は疲れるのよ。」

(グレモリー家は身内への情が厚い言う噂はこの様子を見る限り嘘はないみたいやね)

「あのく、市丸に聞いたのはわかるんですけど。俺には入る云々は聞かないんですか?」

「あら？ 眷属であるイツセーに拒否権があると思つて?」

「あつ無いですね。」

「それとこれはギンにもだけど、オカルト研究部にこれから入るのだから今後は私のことは『部長』と呼ぶように。」

「了解です。『部長』。」

兵藤君は明らかににはしゃいでいる。余程入れたんが嬉しかったんやろうな。まあ気

持ちはわからんでもないけど…。こんだけ綺麗どころが揃つとつたらなあ。

「よろしい。最後に何か聞きたいことはあるかしら？」

「ボクからはなにも。」

「あつそれなら俺から一つ。」

「何かしらイツセー？」

「俺が悪魔に転生したつてことは理解できたんですけど、具体的に何がどう変わったか教えてくれませんか？」

「そう言えばそこら辺の説明をしていなかったわね。そうねえ…朱乃ー？丁度いい依頼なかったかしら？」

「そうですねえ…これなんかどうでしょう？『はぐれ悪魔バイザーの討伐』」

「ふむふむ。ランク的に見学に丁度いいかしらね。イツセーは行くことは確定として…。ギンはどうする？」

「面白そうなんですっていてもええですか？」

「かまわないわよ？でも一応自分の身は自分で守るようにして頂戴ね？」

「勿論です。なんならボクの実力も知つといた方がええですか？」

「そうね、その方が都合がいいかしら…。なら途中から参加してもらおうからよろしくね。その時は裕斗をつけるからそのつもりでね。」

「よろしゅう頼むわ裕斗。」

「こちらこそよろしくねギン。」

「よし！なら今夜21時に、○○×× 廃工場集合。遅れないように！！」  
さて、リアス眷属の力を見せてもらおかね。

初!はぐれ悪魔!!with悪魔講義!!って油断したらあかんよ?

廃工場に集まったオカルト研究部。そこでリアスからの『はぐれ悪魔』についての説明が行われた。

―はぐれ悪魔とは呼んで字のごとく主の下から逃れた悪魔で、力に溺れ理性を失い人を襲う危険な悪魔である―

ギンはそれを聞きながら内心

(まあ、はぐれの比率は純粋な悪魔より断然転生悪魔に多いんやけどな)

と独り言ちた。そんな中、部員以外の声が響く。

「いい匂イがスる。あまいのカナ?それトモ:まずいノかな?」

その声に全員に緊張が走り空気がひりつく。声のする方を見ると柵の間から一人の女性が姿を現す:上半身裸で。

「ウオオオオオオ!」

「兵藤君うるさい。緊張感大事に。」

「先輩。下品です。」



「朱乃、結界をお願い。」

「はい部長。」

しかし、そんなイツセーの勢いもすぐに減衰した。なぜなら、その女性の下半身を見てしまったから。それは四足獣のようだが、既存の動物のものではなかった。恐らく猪や鹿、更には爬虫類やほかの動物のものが混ざり混ざってその結果、名状しがたいものとなつてしまったのだろう。

「うげえ…美人なのにもつたいねえ。」

「吐くんやったらその角でやってな？」

「ギンは大丈夫なのかい？」

「まあそこまでやね。」

「はぐれ悪魔バイザーね？依頼により貴女を討伐するわ！」

「ダレがやラれるか！返り討チニしてやル!!」

ーアアアアアアアアアア!!ー

ビリビリと工場全体が震えるほどの咆哮を上げると、バイザーの姿がミチミチツ、グチャツ、ブチブチ、などと音を立てながらさらに変化していった。咆哮が治まる頃にはもうバイザーの面影はなく、体格も数倍にまで膨れておりもはや混合獣（キメラ）のようであった。

「それじゃあ、二人とも、悪魔についての講義を始めるわよ。」

「今ここでつすか?!」

「大丈夫よ。皆バイザーよりもずっと強いもの。まずはそうね…小猫!!」

「はい!」

リアスの号令とともにギンの隣にいた小猫が飛び出す。

「それじゃ、まず第一に悪魔の駒はその形通りにチエスの駒みたいに種類があるの。そしてそれぞれに能力があるのよ。」

リアスによる講義が行われている中、飛び出した勢いそのままバイザーへと突貫した小猫だったが、変異前にはなかったバイザーの突然伸びてきた尻尾によってカウンターをくらい弾き飛ばされてしまう。そしてそのまま工場の壁に激突する。その勢いと強さは生じた土煙が物語っていた。

「小猫ちゃん!!」

「あらあら。新人さんの前だから張り切りすぎたみたいですね。」

「大丈夫よイツセー。言ったでしょ?皆バイザーよりもずっと強いって。」

リアスの言葉を証明するように起きた土煙から小猫が平然とした様子で出てくる。どうやらカウンターに対しては腕をクロスし防いだようだ。

「講義の続きよ、悪魔の駒には種類があり、それぞれ能力があるって言ったわよね?小猫

の持つ駒は『戦車<sup>ルック</sup>』。そして『戦車』の持つ能力は圧倒的な防御力と攻撃力。ほら、見てみなさい。」

言われた通り目をやると丁度、小猫がバイザーを殴るところだった。

「フツ！」

「ギャアツ！」

驚くべきはその音。ガコン!!、とその華奢な身体はどこからそれほどのパワーを出すのか、さつき吹き飛ばされたとは思えない威力。くらったバイザーはと言うと、変異してかなりの重量と体積が増加しているにもかかわらず、パンチの威力でかなり後退させられている。しかし、そこでバイザーは何かハツと気付いたかように一定のラインからビタツ!!と止まった。

「それじゃあ次は…裕斗!!」

「はい。それじゃ行つてくるよ。」

「おう行つてr」

イツセーが返事を言い終える間もなく木場はその場から消え、気付けば木場はバイザーの頭上まで跳んでいた。木場は消えたのではない。ただイツセーが認識できないスピードでバイザーのもとへ行きジャンプしただけである。

「裕斗の持つ駒は『騎士<sup>ナイト</sup>』。その能力は…って言わなくても見たらわかるわね。その特徴

は機動力の向上よ。イツセーが目で追えないくらいだね。どうやらギンには見えていたみたいだけれど。」

リアスの言ったことは正しく、ギンの目にはしつかりと木場がバイザーに接近し、ジャンプするまでの

一挙手一投足ハツキリと見えていた。

「まあ、このくらいって言っただけのかわかりませんが、出来ひんかったらそもそも墮天使相手にケンカ売りませんって。」

「それもそうね。それと、これは悪魔の駒とは関係ないのだけれど裕斗もイツセーと同じく神器持ちよ。」

その言葉に答えるように空中の木場の手にはいつの間にか剣が握られていた。

「木場の神器ってあの剣か?」

「その解答じゃ三角ね。」

裕斗の神器は剣自体じゃなくて剣を造る創造系の神器よ。」

「たタキ落とシてやる!!」

バイザーが木場を迎え撃とうと腕を伸ばすが、それは叶わなかった。木場の背後に雷

を纏った剣がどこからともなく5本現れ、

バイザーの腕を地面と縫い付けた。

「裕斗の神器の名前は『魔剣創造』<sup>ソッド・パス</sup>。持ち主の想像する魔剣を造ることができるわ。」

迎撃するはずだった腕を縫い付けられ、完全な無防備になったバイザーに木場の持つていた剣が襲い掛かる。

「ガアアアアアアア!!うデが!腕がアああアアあ!!」

見事木場の振るった剣はバイザーの腕を一刀両断し、すぐに木場はその場を離れた。

なぜならリアスのもとを既に離れていた姫島がバチバチ言わせながらいい笑顔を浮かべていたそこにいたのだから。

腕を再生させたバイザーの前に死神<sup>姫島</sup>が立っていた。

「最後に朱乃つてもう…もう少し待てなかったのかしら?」

「うふふふ♪私も混ぜてくださいな。」

「イツセー、ギン、最初に言っておくことがあるわ。朱乃は『究極のS』よ。」

「見ればわかります。」

目の前の光景は悲惨と言う他なかった。そこは言うなれば地獄。バイザーの周りには雷が降り注ぎ、

それをバイザーは必死に避けていた。そして姫島はと言うと…

「うふふふ・うふふふふふ・」

恍惚とした表情を浮かべていた。『究極のS』。その言葉に変わらずバイザーを襲う雷はどれも急所を外されており

しかし、足の先など痛覚が通っているとされる場所を的確に撃ち、時に回避させ、時に防御させ、

それに伴う再生によって着実にバイザーを疲弊させていった。

「朱乃の持つ駒は『女王』<sup>クイーン</sup>。駒の能力は：わかるかしら？ギン？」

「チェスの駒で言う『女王』は確かほかの大駒を合わせたような動きやから：：ってまさか？」

「そのまさか、『女王』は『戦車』の攻撃力、防御力と『騎士』の機動力を併せ持つ。

因みに、もう一種類『僧侶』<sup>ビショップ</sup>って言う駒があるのだけど、その能力は魔法力の向上と  
なっているわ。」

この朱乃の雷の威力が高いのは本人の地力もあるけど『女王』が『僧侶』<sup>ビショップ</sup>の能力も持っているからでもあるわ。」

「なるほど…」

納得するイツセーを傍目に、今までじっとしていたギンが動き出した。

「ギン?どうしたの?」

「いえいえ、そろそろ選手交代でしょう？部長としてもボクの実力知りたいでしょうし……」

スタスタとドS化した姫島のもとに近づき

「いいですね、いいですねえ！ホラホラア!!避けなきや当たつちやいますよ!」  
「ていつ。」

「痛っ!」

拳骨を握った手で軽く小突いた

「!？」

「あはは……」

「あら?」

「うおおい!」

背後でなにやらキーキーとうるさいがギンは無視した。

「気いつきましたか？姫島先輩?」

「何をするんですか？ギン君。」

「ボクらは彼女を討伐しに來ただけで、甚振りに來たわけやないんですよ？やりすぎです。」

「ですが！せっかく楽しくなってきたというのに……」

「先輩は部長の『女王』なんですすよね?」

「そ、それがどうかしたんですか?今何の関係が?」

「副官である先輩はリアス眷属の中で一番見られるゆう事です。なのにそんなんでええんですか?」

リアス眷属はこんなもんなんだ、って下に見られませんか?」

「む、むう。」

「そないむくれんでください?なにもするな言うてるわけやないんです。

時と場合を考えてくださいってだけで…」

そう言つて姫島の頭を撫でるギン。

(あら?この感じ…前にも?って私は何を考えて…)

「やっぱりギン、貴方悪魔にならない?朱乃の暴走を抑えられるのは貴重な戦力なんだけど。」

「答えはあん時と変わりませんよ、部長。というわけで、交代です姫島先輩。」

「やっぱりギンが使うのってそれなんだね?」

「そらまあ、ぶら下げてるもんは飾りやないよ?」

そう、ギンの腰からは一振りの刀が着けられていた…

「…かなりの再生能力を持つてるみたいやけど、度続く負傷でそれも限界やろ?」



ギンの目の前にはシウシウと音と煙を立てながらうずくまっているバイザーが……。

再生時の煙によつてその姿全体が一瞬隠れる。

「ならどうなるか。修復も追いつかず、かと言つて黙つてこのまま消えるか？」

いや違う、その中間、ケガの無い頃に戻る。つまりは小さくなる。若返り、言うわけや。」

煙が晴れるとそこには先程の巨軀の女はおらず、バイザーと思しき幼い少女がいた。しかしその容姿に似合わずその目には変わらない戦意を滾らせ、こちらを睨んでいた。そしてその少女の姿が掻き消え、耳を劈く轟音が響き渡る。思わず体が硬直してしまっていた一同はすぐに周囲を警戒するが、そこにバイザーの姿はなく、よくよく見るとギンの姿もないことと先程まで何もなかったはずの壁に大穴が開いており、それが外まで続いていることに気付いた。一同はすぐにさっきの轟音がバイザーが壁を壊して外に出た音だと察した……

それにギンが巻き込まれたことも。

◆ 急いで外に向かう一同が目にした光景は、凄まじい、の一言に尽きた。その視線の先

ではバイザーの攻撃をギンが凌いでいた。しかし言うは易く行うは難し、だ。バイザーはまず小さくなったことでスピードがかなり上がっており、その持ち前のスピードで以て接近戦に持ち込んでいた。かなりの速度の拳や足に襲われているのだが、それに対しギンはギリギリのところまで体を逸らし、半歩ずらすなどして躲していた。そんなバイザーのラツシユの合間の隙を見計らい、ギンはその腕を掴み、一本背負いの要領で投げ飛ばした。空中で体勢を立て直し何とか受け身をしながら着地したバイザーとそれとじつと見るギン。少しばかり沈黙が続いたが、その沈黙を今度破つたのはギンであった。鞘に手をやり、鐙を押し上げ、すらあつとその刀身を露わにする…。それは何の変哲もない刀であり、一見何もおかしなところはないように見える。

その状態がすでに変化したものであることには誰も気付かずに。

(おおきに、『神槍』)

そう、ギンは神槍を始解し、脇差から一般的に刀と呼ばれる長さまで伸ばしていた。まあ、今回は神器持ちとバレるわけにはいかないため死覇装は纏わずの戦闘なので瞬歩は使えないのだが、ギンの様子を見る限り何ら問題はなさそうである。刀を抜いたのを見たバイザーは投げられたのも踏まえ、近距離戦は不利と思つたか、背中から触手を何本も伸ばしギンへと向ける。

一本、瞬きをする間もなくギンの顔面へと迫る……すんでの所で切り払われた。

二本、三本、一本目に隠れるようにして同じように迫る……いつの間にか切られていた。

四本、五本、軌道は同じようにして目前で左右に分かれ挟み撃ちにする……一步引かれて重なつたところを切られた。

六本、四本五本目と一緒に伸ばし、頭上から一気に振り下ろす……上段で防がれダメージは与えられなかったが少し動きが止まる。

七本、地面スレスレの横薙ぎで足払いをかける……六本目を力づくではねのけられ、跳躍によって躲かれる。

八、九、十本、三本をまとめ、強度を上げ、なぎ倒す勢いで振るう……刀を腕で支えるように防がれる。

かなりの勢いと力であるはずなのにピタツと触手は止まり、バイザーがどんなに力を入れようとしてもギンは一步も動くことなどなかった。

「ッフ!!」

ギンが気迫のこもった声を上げると触手たちをはねのけ、あつという間にバイザーのもとにたどり着き、斬りかかろうとする。ギンが刀を振り上げた時にようやくバイザーも反応できたようで、残っていた触手を総動員して壁を作るがギンはお構いなしとその

壁ごと切り伏せた。バラバラ、と触手が落ち切り口から遅れて血が飛び出す。その滴った血が地面に落ちその部分が溶け落ちる。

(酸、か…。まあ関係ないかな?)

切れた触手を振り回しその強酸性の血を振りまくが、その先には既にギンはおらず、その血を掻い潜って神槍がバイザーの胸を刺し貫く。

「ガハッ」

「終わりや」

神槍を引き抜き、叩き切った。



力尽き、とうとう膝をつくバイザー。どうやらもう抵抗する力も尽きたようである。残心していたギンはリアスの方を振り向いた。

「もうええですかね? 最後頼んます、部長。」

「え、ええ。貴方ってよく嘘つきって言われたい? 今日学校で『少し動ける程度』って言ってたけど、全然それ以上じゃない。」

「いえいえ、じぶん力あんまりひけらかすんが好きやないだけですよ。」

「まあいいわ。はぐれ悪魔バイザー、何か言い残すことはあるかしら？」

「…さっさと殺せ」

「そう。」

リアスの構えた手に魔力が集中し、徐々に高まっていく…それに合わせて空気もピリピリとプレッシャーが強くなる。

「なんすか、あれ。」

「どう見てもフツの魔力弾やないデシヨ。」

「フフフ♪ご明察です。グレモリー家はある魔力で有名なのですよ。その魔力は『消滅』。その力から部長は巷では「紅髪の殲滅姫」なんて呼ばれていたりするんですよ？」

「うへえ、おつかないですわあ…」

魔力をチャージしていたリアスがゆっくりとバイザーが近づいていく…どうやら準備が整ったようだ。

「それじゃあ、さようなら。」

リアスの腕が振るわれ、それに沿うように魔力波が炸裂した。

「うわっぶ!!」

「っと」

「あらあら♪」

その場に爆風が吹き荒れその余波がギンたちを襲う。

「キャッ!」

「よいしょ!」

爆風は小柄な小猫を攫い、フワツと浮かび上がりそうであったがギンがその腕を掴み、踏みとどまることができた。

「塔城さん大丈夫?」

「あ、ありがとうございます／＼／＼」

「グギギギギギ…」

「羨ましそうに見えるんやないよ兵藤君。」

辺りに爆風による土煙が充満し、リアスが一仕事終えたように一息ついて、気を緩めながらこちらを向いていた…。

「みんなお疲れさま」

しかし、そのリアスの背後の煙がおかしな動きを見せた。煙を割いて伸ばされる触手、そのすべてがリアスを害そうと牙をむく。

「部長!!」

「っ!!」

一番に動き出したのはイツセーであった。

悪魔のスピードでリアスのもとまで行き、そのまま抱きかかえるようにして後方へ下がった。

入れ替わるようにして次に動いたのはギン。

触手をすべて切り落とし、

(破道の五十四つ！・這炎!!)

紫の炎の円がバイザーに触れた瞬間、炎が上がる。真正銘力を使い尽くし、その場に崩れ落ちたバイザー。その目には憎悪が浮かび、射殺さんばかりに目の前のギンを睨みつけていた。それに対しギンは…

「恨んでええよ」

その言葉にバイザーは目を見開いた。今まで自分を狙ってきたのはどちらかと言えば姫島のように狩りの対象として見ていた…のに目の前の男は自分に『恨んでいい』と言ったのだ。その言葉は相手は自分と対等なのだと言外に言っているようにも感じ、そんな風に言ってくるやつなど今までいなかっただ。その上この男は続けて言った。「恨んでええ、許さんでええ。君にはその資格がある。ただ…後のことは任しとき」

バイザーは今度こそ目を？いた。

ーき・づ・い・て・た・の？ー

正しく発音できていたたかわからない、でも確かめなければならない。

「あんだけあからさまやったらね? まあ気づいとんのはボクだけみたいやけど…けど安心しい、君の思いは無下にはせえへんよ。やから心配せずもう休んでええんよ?」

ーあ・り・が・とー

今度は、今度こそはしつかり言えただろうか? 伝わっただろうか? 重くなつた瞼に従い徐々に意識が落ちてきた頭の中でそれだけが気がかりだった。



「じゃあ頼んだで?」

後ろのメンバーに聞こえない声でギンが呟くとどこからか、にゃーんと猫の鳴き声が聞こえた。チラツと後ろを見るとイツセーがリアスに対して謝り倒していた。近づくと徐々に会話が聞こえてくる。

「ほんつつつとに!! すいません!!」

「いえ、そんなに謝らなくてもいいのよ? おかげで助かったわけだし…」

「ただいま戻りましたよーつと。」

「ああ、お帰りなさいギン。貴方もありがとね?」

「いえいえ、ところでこれは?」



「実は……」

イツセーがリアスを抱え、バイザーの攻撃から逃れ退いた時、退いたところまでは良かったが問題はその後。新米悪魔であるイツセーはスピードを出したはいいが止まり方がわからず、さらには足をもつれさせ見事ヘッドスライディングを決めた。リアスを抱き寄せていたため彼女自身には怪我がないことが不幸中の幸いであった。

「で、それに申し訳なくなつた兵藤君はこうなつてると……」

「ええ、できれば彼を戻してくれないかしら？ 私じやどうやら逆効果みたいなの。」

「はあく、しやーない。ほら！ 兵藤君！」

「な、なんだよ、市丸？ 笑いたきや笑えよ……かつこつけて飛び出した挙句、最後の最後で大失敗した俺の事なんか……」

「ボクが言いたいことは一個いっぴこだけや。」

「……ゴクツ」

「……おおきに、助かつたわ」

「へ？」

「部長が襲われた時、多分ボクやつたら間に合わんかった。しかも、あん時ボクら以外

は咄嗟のことで動けへんかったし…」

なんなら、ボクは君の声で動けたようなもんやしね?と続けて

「で、大体よ?この間まで一般人やってた君がこん土壇場でない動けた時点でたいしたもんや。力加減についてはこれからおいおいやっていけばええやろ?部長さんもケガしてないみたいやしそれでええやないの。」

「う、お前に褒められるなんて…。っていうかなんであんな早く動けたんだ?俺。」

「なんや氣付いてへんかったん?ほら、自分の腕見てみ?」

そう言われイッサーが自分の左腕には籠手が出現しており、それはイッサーの神器『龍の手(トウワイス・クリティカル)』であった。

「無意識的に使ってたみたいやね。確か能力は力の倍化やつけ。やからあない速かったんやね。さて、ボクがさっき言うたことも踏まえて部長さんの話を聞こか?」

「その言い方はズルいんじゃない…ないかしら?…コホン。イッサー、それにギンもありがとう。おかげで誰もケガなく、無事バイザーを討伐できたわ。」

心なしか『誰も』と『無事』を強調しながら高らかに言うリアス。

「ギンも言ったけど、イッサー。貴方が助けてくれなかつたらまず間違いなく私はバイザーの攻撃を受けていたでしょう。正直、貴方がここまで動けたことに驚いているわ…。そう言えばギン、バイザーのは?」

「バツチリ倒しましたよ？あ、でも燃やし尽くしてもうたんで死体の方は諦めてください。」

「魔法を使ったの？」

「まあうちの術、とだけ言うときます。」

「そう、じゃあ一件落着!!ということとで解散しましょうかしら？朱乃、結界を解いて頂戴。」

「はい、部長。」

「あ！ところで部長！」

「何かしら、イツセー？」

「俺に使われた駒の能力って何なんですか？」

「ああ、そう言えば言っていなかったわね。イツセー、貴方の駒は『兵士<sup>ポーン</sup>』。能力は……」

「能力は？」

「ないわ。」

「無い!?!」

余程ショックだったのか、それとも緊張の糸が切れ気が緩んだからのか、イツセーはその場から動かなくなってしまった。それをスルーしてリアスは部員全員を見渡すと、ふと、一人に目が行った。

「朱乃?」

「……」

「朱乃?朱乃ってば!」

「!!はい、どうかしましたか、部長?」

「どうかしたって、そっちこそどうかしたの?何か考えふけていたみたいだけど。大丈夫?」

「いえ、何でもありません。大丈夫ですわ。」

(結界を解いたときの違和感…例えるなら敷物を畳むときに何か巻き込んだような…そんな違和感。気にしすぎですかね?)

「ほら、イツセー。いつまで白くなってるの。早く帰るわよ?」

「……」

「…だめだこりゃ。裕斗と小猫、引きずつてもいいから連れて帰るわよ。」

「はい。」

リアスの声に応え右手を木場が、左手を小猫が掴み言われた通り引きずるのもお構いなしに引つ張っていく。

「変わるか?」

「いいえ、大丈夫です。」

引きずられている張本人はというと、——無能無能無能無能無能——とうわ言の様に  
呟いていた。

一行が去った後、月を雲が隠し夜の闇も相まって真つ暗な廃工場。バイザーが最期に  
いたと思しき炎上跡、小さな影があった。跡を前にして蹲うすくまりその足元は何か水滴が落ち  
たように濡れ、また小刻みに震えており、それが泣いているであろうことは想像に難く  
ない。

「やっぱり居はったんやね」

突如として拳がったその声にビクツと肩を跳ねさせ、その方向に視線を向ける。

「まいど、こんばんは」

そこにいたのはさつき帰ったはずのギンであった。それに合わせるように月を隠し

ていた雲が動き、徐々に月明かりがその影を照らす…。ローブを羽織っていたそれは暗闇も相まって姿が見えていなかったが、月明かりによつてその姿がようやくはつきり見えた。そのローブから覗く顔はまだ幼く、どこはかとなくバイザーの面影があった。

「君はバイザーあの身内で合うてるかな?」

「……。」

「だんまりか…。それとも喋れへんのかな? 参つたなあ、これじゃ埒明かへん。」

「…姉を殺したヒトが何の用ですか。」

「良かった、口が利けへんわけやないんやね。というか君は彼女の妹さんか…」

「質問に答えてください。それとも今度は私を殺しに来たんですか?」

「うゝん…。別にそんなつもりもあらへんよ? ただ、君をお姉さんに会わせようつてだけやよ。」

「!! あつてるじゃないですか。殺した姉に私を会わせるんでしょ、言い方が違うだけじゃないですか。」

「? なんや会話がかみ合うてへんね。というかボクは君のお姉さんを殺してへんよ?」

「は?。」

空気が一変する。目の前の少女からギンへと向けて突き刺さるような殺気が向けられているが、向けられている本人は全くのどこ吹く風…。

「まあ百聞は一見に如かずってね」

ギンは何もない空間に手をかざしカーテンを撫でるように手を滑らせるとそこにある空間が裂けていく。そこには先程死んだはずのバイザーとそれを治療している黒歌が居た。

「姉さん!!」

「にや!!ギン!!遅いにや!!早くこつち来て手伝うにや!!」

「ボク、鬼道と違って回道の方は苦手なんやけど…」

「何言ってるにや、誰のせいでこんなに治療してると…」

「ハーイ、テツダイマース」

バイザーを挟んで黒歌の反対側に座り手を当てて回道を使っていく。

「な、なんで姉さんが…?いえ、そもそもなんで敵である貴方が治してるんですか!?!もう訳が分かりません!!」

「あー、治しながらやから大雑把に言うとな今回の一件、臭すぎたんよ。」

「臭すぎた?」

治しながらチラッと少女の様子を見ながらギンはそう、と続けた。

「まず、今回は最初から標的の『捕縛』やなくて『討伐』が依頼者の要望やった。」

「それは…はぐれ関係の依頼なら珍しくもないのでは?」

「確かにはぐれの依頼では討伐が多いけど、それは完全に異形化して暴走してもうた相手に多い。それに対し今回は完全に人型相手にもかかわらずの要望。」

「そうだとしても、それだけで姉さんを助けるには根拠が弱いのでは?」

「もちろんそれだけやないで?理由は後二つある。一つ、これはさっきのにかぶるんやけど、討伐依頼が出てる割にはこん子は理性がはつきりしすぎてた。それに意思の疎通もできとつたしね?それなのに『捕縛』や『確保』の一文すら見せへんのは少しおかしい思うたんよ。」

「最後の二つは?」

「依頼者。」

ギンは短く答えた。

「へ?」

「依頼者がなあ、どうもどつかで見たことある名前やなあ思うたら。そこにいる黒歌の資料で見た名前やったんよ。で、よくよく思い出せばそいつ悪い噂しかあらへんし。で一応黒歌に裏取つてもろうたらピンゴ、つて言うだけ。」

「ほんと、急に頼んでくるもんだから大変だったにや!ギンはもつと感謝してほしいにや?」

「お、ようやつと喋った言うことは」



「うん、もうこの子は大丈夫にや！ていうかギン。苦手とか言つてその…回道？だっけにや？そこら辺のやぶ医者よりも治療上手かったのにや。」

「黒歌に比べたら全然やよ。」

「まあいいにや…。ほら、もう少ししたら目を覚ますと思うわ。だから、そんな離れたところにはいいで傍にいてあげなさい。」

ギンと一緒に立ち上がり、少しバイザーから離れると、よろよろと覚束ない足取りでバイザーのそばで膝をつきその手を取り、その温かさを確かめるように大事に、大事に抱きかかえるバイザー妹はまた肩を震わせ泣いていた。さつきとは真逆の感情をその内に溢れ返させながら…

それを離れたところから見ているギンと黒歌は、というと…

「黒歌。」

「ん、にやゝに？」

「おおきに。」

「どうかしたのかにや？急に改まって」

「黒歌のおかげであの姉妹を助けられたわ。」

「ふふん。もっと感謝するがいいのにやゝ」

「うん、本当におおきに。」

「…なんか調子が狂うにや。いつもならここらへんで落とすか貶すかするはずにやのに…」

「それだけボクが感謝してるゆうことやよ。」

「まあ、ギンが感謝するのは嬉しいんだけどアレはやりすぎだと思ふのにや。」

「それに関しましては本気で悪かったと思ふてます。」

「あとで彼女たちにもしつかりと謝るといいにや。」

「はい…」

「ギンにはやんでバイザーに妹がいるんだってわかったのにや?」

「??」

「いや、彼女見つけた時に『やっぱり…』って言ってたから」

「ああ、そういうこと…これは妹さん時の説明にもつながるんやけど…バイザー、途中から今みたいな小つちやい姿になりはったんよ、なのにその姿になったとたん外に飛び出したんよな。屋内の方が障害物もあって小さい体の方がスピードも相まって有利なはずなのに。」

一呼吸置いた後ギンはさらに続ける。

「その前からおかしな点はあつたんよ。あるエリアへの攻撃をいやに嫌ったり、その場

所への攻撃自体をさせないように立ちまわったりね…。やから、ああ誰か、ないし何か守ってんかなあつて思うたんよ。彼女に理性がちゃんと思ふたんとある思うたんもこれが理由やね。あと、壊れている演技がわざとらしくつたし…」

「へえ、よくそこまで見えていたにやあ」

「ここままで会話は途切れる。」

「……」

「……」

「ところでギン？ギンがあ姉妹を助けた理由ってほかにもあつたりするのかにや？」

「なんです？藪から棒に…」

「もしかして私私と白音たちが重なったんじやにやいかにあ？つて」

「さあてねえ？……ところで黒歌さん？」

「なににやあ？」

「彼女バイザーへのあの言葉。珍しく猫語尾も消えてましたが、そちらこそ小猫妹さんと重ねたんやないですか？」

「さあてにやあ？」

「……」

「……」

「あ、そう言えば」

「??今度はなんにゃ?」

「久々に会った妹さんはどうでしたか?お姉ちゃんとして」

「!!そらあ、もう!!めっちゃめっちゃ可愛くなつてたにゃん!!」

「うわ、うるさ」

「もおくあんなにきれいで可愛くなつちやつたら変な男が付きそうでお姉ちゃん心配にゃ!!」

「なら早よ仲直りしいや?」

「……」

「…なんでそこでだんまりなるかなあ?」

「うう、こればかりは仕方ないにゃん。」

「はあ(\*・皿・)ゝ、ああ、妹さんで思い出した。今後二人が仲直りするまで黒歌はスキンスリップ禁止な?今日なんか匂いで訝しんではったし、塔城さん。」

「にゃにゃ?!!」

なかなかへタレ発言やったと思うんやけど？

side:バイザー

私は今、一本道の真ん中に立っている。意識がどこかフワフワしてかろうじて自分が道の上にいることだけはわかった。周りは暗闇に包まれており、ただ延々と道が続いている。前を向けば光が射し逆光となり、振り返るとただただ闇が広がっていた。…とりあえず、光の方に向かおうか？

◆

かれこれ結構歩いたと思うが光が大きくなることもなく、近づいているような気もしない…。そして歩いているうちに少しだけ意識がはつきりしてきて、自分のことを思い出してきた…。私は確かあの青年に斬られ、死んだはず…。ということはここは天国か地獄かの分かれ道だろうか？日本では閻魔様ジャマンが生前の罪を裁くというが、実際はそんなこともないらしい。まだまだ、天国は遠そうだ。

歩き始めてから体感的にかなり経ち、光も最初に比べ近くなったようにも感じる。しかし、まだ夢心地のように感じながらも少し気がかりなことがある。それは妹のことだ。あの青年は任せておけ、と言っていたがあの子は私が死んだことで沈んではいないだろうか…。いや、おそらく悲しみに暮れるだろう。それくらいは姉として分かる。一番困るのは私の後を追うことだが、それはあの青年が防いでくれると思いたい。そんなことを考えていると、急にグイッと後ろに引つ張られる。目を向けると一本の手が私の腕をガシツと掴んでいた。その力は強く、かなりの勢いで後ろに引きずられていく。その恐怖感は一気に私の頭を冷えさせて、夢心地からパニックに陥る。

「い、いやー離して!!」

悲鳴を上げようと、暴れて体をよじろうともその手は離されることもなく、むしろ引きずるスピードがさらに上がる。

(もう少し…もう少しで楽になれるのに…!!)

ああ、やはり私は天国には行けないんだ…。悪魔が天国に、というのもおかしい話だ

が、何もこんな仕打ちをしなくともいいだろう。それなら、気が付いたあの時点で地獄に落とされた方がよかつた。目の前に餌を吊るしておいて、

届くのではないかと希望を持たせておいて、

道半ばで奪わずともいいだろう……！恐怖と絶望からその視界を滲ませながら光が遠のいて行くのをジツと見ることしかできず、自分の無力さが嫌になる。心がその絶望に染まりかけた時、腕を掴んでいた手とはまた別の手が私の右手を握ってきた。

——ああ、本格的に地獄が私を捕らえに来たのか

そう一瞬考えがよぎるが、その手は今までとは大きく違った点があつた。それは、その手に温もりがあること。その手には生きているもの特有の温かさがあつた。そしておぼろげに懐かしいような、見覚えがあるように感じた。そしてそれはすぐに確信に変わる。

(そうだ、そうだ……！そうだった!!)

この手は、長年繋いできた、ずっと離さなかつた手だ！大切にしたい、守り抜きたいと思つていた手だ！どうしてすぐに気づけなかつたんだらうか、この手を忘れるはずなにかないのに……この妹の手を!!その手にじぶんの手を添え、強く握る。先程とはまた違つた意味で視界が滲んでくる。ふと、では自分が見ていた光とは何だつたんだらうか？

と光の方を見るとヒュツと息をのむ。私がさつきまで天国だと思っていた光はその姿を変えていた。あんなに明るかったはずの光が打つて変わって闇すらも飲み込むようなドス黒さと禍々しさを放ち、こちらを飲み込もうとじわじわとにじり寄って来ていた。迫りくる恐怖に取り乱しかける。

ー……てよ

しかしその時、いつもよく聞いたあの子の声が私の耳朶を打つ。その声は私の恐怖を抑え込み、もはや闇と変わらない光に向けて生唾をのみながらも言う。

「私は……まだ……そちらに行くわけにはいかない」

あの子に任せただけ、一度は諦めてしまっただけ、あの子の姉は私だけなのだ。それにさつきの声……

ー……きてよ。早く起きてよお……お姉ちゃん……

あんな嗚咽交じりの声を、妹の声を聴いてしまったなら、姉として、なにがなんでも起きなくてはならないではないか……。そう自嘲気味に笑いながら、私は意識が本当の意味で浮上するのを感じた。

バイザー視点：side out

side：第三者視点

現実ではさつきまでいた外から場所を移して元の廃工場に戻り、どこからか持つてき



た毛布の上にバイザーを寝かす形で一同は見守っていた。

「そない睨まんといてや?」

「う”う”う”う”…」

「これに関しては全面的にギンが悪いにや。」

…なにやらひと悶着はあつたようだが、それはバイザーを運ぼうとした時――

「な、何するんですか!!」

「何って…こんまんま目え覚ますまで外に放置するんも不味いやろ? 段々冷えてきとるし」

ギンはバイザーを抱えようと傍にしゃがむが、妹に警戒させる結果となった。

「??何がアカンの?」

「ギンにしては珍しいプレミにやあ?」

「プレミ?」

「黒歌クローイズ!今のバイザーの格好はどうなつていでしょーかにや?」

「格好?…ああ、そう言えばそうか。うん、これは確かにプレミやなあ」

そう、今のバイザーはリアスたちの攻撃を、さらにはギンの鬼道を受けてポロポロになつてしまつている。つまりはほほ裸のような状態である。

「ほらほら、男子は先にお姫様のためにベッドメイクでもしてるにや♪」

「はいはい…。妹さんも配慮がたらんでゴメンな？」

「……」プイッ

「たははは…」

——ということもあり、バイザーのそばにいなながらも絶賛威嚇中である。

そしてついに、移動中も片時も離さなかった彼女の手にピクツと反応を見せた。

「!!お姉ちゃん!!」

姉の手をさらに強く握り呼びかける。その声に反応するようにバイザーの瞼がゆつくりと開かれた。

「んんっ…」

「おはようさん。いや、時間的にはおそようさん、かいな？」

「よかった、あんまり起きないもんだから何かミスしたかと思ったにや！」

「よかった…姉さん。本当によかった…」

「私は…死んだんじゃ…」

「あくあないな事言った手前、格好がつかへんねんけどな？」

『あないな事』とは…

——恨んでええ、許さんでええ、君にはその資格がある。ただ、あとのことは任しとき

「あそこでああでも言わんと大人しくしてもらえへんかったやろ？」

「つ!!まさか貴方達も私たちを!!ぐっ!!」

バイザーが起き上がろうとしたが、体に力が入らず尻もちをつくだけとなってしまう。

「こらこら、傷は治っても体力は戻ってないんだから、じつとしてなきやダメにやん」

「勘違いせんといてほしいんやけど、別にボクらは君らを改造したやつらの仲間やないよ?」

バイザーの肩を抑え、改めて寝かせる黒歌。

「…そうじゃないという証拠は？」

「もしボクが仲間やったら、横の彼女を差し出さなあかんくなるなあ」

「横の……あ、」

「なんか今不名誉な謂れを受けた気がするにや…。」

「言われたなかつたら、早よ塔城さんに会いいや?で、分かってもらえたみたいやね」

「私も有名になつたもんじゃあ」

「妹さんの方はわかってへんみたいやけどね」

「ん?んん?」

バイザーは納得顔をしていたがその妹は意味が分からず、頭上に? (クエスチョン

マーク)を浮かべていた。

「確かにギンがアイツらとグルだったら今頃私は実験台に逆戻りにや」

「黒歌は君のお姉さんと同じはぐれ悪魔なんよ」

「同じなんてそんな！黒歌さんは私よりも上の上、S級じゃないですか！」

「まあまあ、等級なんて今はどうでもいいじゃにやい。さつきと本題に入るにや」

ギンに話すように少し照れながら促す。

「そうやね…本題言うのは君たちの今後についてや」

「今後…？」

「君は死んだことになつとる。バイザー、君はもう自由や」

ただ、とギンは続け

「それも向こうさんが気付かん限り、つて言う期間限定のもんや…君らはこれからどう

するん？何か当ては…」

「……」

「その様子から察するになさそうやね…。なら君らに提案や

1つ、このまま今まで通り二人で生きていく

これはあんまり建設的ではないなあ。さつきも言うたけど、また追手が出されるのが

関の山やろうしね。

2つ、悪魔側に保護してもらおう

木の葉を隠すなら森の中みたいにはバレるん可能性は低い。一応、ボクの伝手で信頼できる人に君らを任せることもできるんやけど…」

ギン曰はく、狙っている奴らが奴らなだけに権力で出られた場合面倒だ、と

「嫌だ!!」

突然バイザー妹から拒絶の声が上がる。

「まあそうなるわなあ…。君らからしたら悪魔を信頼できるわけあらへんし無理には言わへん。なら、

3つ、墮天使側に保護してもらおう

これが一番無難やない?聞いた話によればはぐれ悪魔の保護もやってるみたいやし、こつちにも伝手もあるから割かし待遇はいいと思うで?」

さあ、どないする?、そう言いギンは二人を見やる。

「…3つ目の」

「ん?」

「4つ目の選択肢は駄目ですか?」

「4つ目?」

「貴方の下に降ることはできないでしょうか?」

「「はあ?!?!」」

「いえ、考えたのですが…」

まず1つ目は問題の先送りで根本的な解決にはなっていないません。

次に2つ目は私も妹もあいつらに振り回されるのももううんざりです。

最後に3つ目については比較的安全かもしれないませんが以前…」

「それは二人が駒王町にくる少し前」

「ねえ、あいつは?!」

「まだ追っつけてきてる!!」

バイザーは妹を俵のように担ぎ屋根の上を激走していた。そしてその数メートル後ろから

「?!?!」おい待ってって!ちよつと体を診(見)させてほしただけなんだよ!!」

明らかに不審者が追いかけていた。声からして男性であることは確かだがボロボロの服装やサングラスを掛けているため年まではわからない。さらにはその男の発言が二人の恐怖感をさらに駆り立てた。

「そんなの信じられないわけないでしょ!?!」

「発言が変態おやじのそれじゃないの!!」

背筋に走る悪寒と立った鳥肌を無視しながら走る二人（一人）は思いを馳せる。  
なんでこうなったのか、と

事の始まりは路地裏で二人が寄り添って蹲っているところに男が足を止め近づいていき、

「お前…はぐれか」

その一言を聞いた瞬間バイザーはすぐさま妹の首根っこを掴みながら男との距離を開けるように後方に飛び退く。なぜバレたのか、どこの追手なのか、などの驚きや疑問を頭の隅に追いやり相手をうかがうバイザーであったが、その背に嫌な汗が伝う。それもそのはず…

(…：…わからない?)

相手の力量がわからないのだ。今まで二人を狙ってきた者達は大きく分けて2種類いた。

一つははぐれ悪魔を討伐しようとする者。

そしてもう一つ、過去にはぐれ悪魔の被害を被った一般人。

後者は大抵、記憶処理によって被害自体をすり替えられるので可能性は低い。ので、おそらくこの男はカタギではないのだろう。しかし過去に二人を追ってきた者たちはその自分の大なり小なりの力を隠すことなくひけらかしていた。にもかかわらず、目の

前の男は侮りもせず、かと言ってこちらにビビっているわけでもない。そんな不気味とも取れる男が再度口を開く。

「あー、そんなに警戒しなさんな。別にオレは悪魔陣営関係者じゃねえから」

「…ハッ！それを鵜？みにできるわけないでしょ」

「それもそうか…」

「……………」

そうして二人の間に数秒の静寂が流れ、男がそれを破った。

「その術式、○○○○のか…」

「…………ツ!?なぜそれを!!!」

「わー！待て待て!!オレは技術屋なんだよ！だからそーいう事にも詳しいんだ!」

「……………こだ」

「あん?」

「どこの技術屋なんだ、と聞いている!」

「んー、別に言ってもいいか?墮天使陣営だよ。これで満足か?」

男が口にしたのはバイザーたちがこうなった原因である奴らの名。やはり奴らの仲間か!?!と敵意をむき出しにするバイザーたちに慌てたように、少しばかりの諦めも含んだ弁解を伝える。これは言うつもりなかつたんだがなあ、と付け加えて。



「診てやろうか？」

「ツ!!」

「オレも技術屋の端くれだ、何かできるかもしれないねえ。何より…」

「……興味がある。」

その目をバイザーは知っている。奴らの目だ。何かに魅せられ、それに手を伸ばす。どこか純粹で、無邪気で…なにより狂っている目だった。そしてその目はバイザー達にとつてトラウマであった。そんな目の先にいるバイザーは恐怖で身が竦み、金縛りにあつたかのように動けずにいた。

「ん?…おーい?」

「恐がらせちまったかな?」と男が声をかけるがバイザー達に反応はない。男の声など耳にも入らないバイザーはふと、足元の妹が目に入る。妹もバイザー同様に恐怖に蝕まれていた。体を小刻みに震わせ、呼吸も少し過呼吸気味で顔色など死人のように悪いと言っている。それに気づいたバイザーは自分を鼓舞し、体の支配権を恐怖から奪い返して妹を抱え壁を蹴り逃亡を謀った。

その結果、上記のようになったのだが…。

余談だが、この追いかけてこは男が別にやって来た大柄な男とその取り巻きに抑えら

れている間に二人が逃げ切る、という結果に終わった。

「と、言う事がありました」

「あぁ、まさか…」

「それって…」

ギンと黒歌は同時に同じ人物を思い浮かべていた。

どちらも思い浮かべたのは墮天使のトップであり、変人としても知られている人物。二人は顔に出していたが幸いにしてバイザー達はそれに気付くことはなかった。

「…まあ墮天使側に行きたないんはわかったわ。でもなんでボクに拘るん？自分で言うのもなんやけど大したもんやないで？」

「端的に言えば恩を返したいのです。貴方達のおかげで私は今もこうして妹と居られます。そうでなければ、今頃私は妹一人残してあの世行き…。妹が無事の保証もなかったでしょう」

「いや、だとs「それに!!」……」

「それに、貴方自身は大したことないとおっしゃりましたが、貴方の力は私が身をもつて知っています。」

「どうか、私に仕えさせていただけませんか？」

「んぐつ…」

「ギーン？負けにや、負け。即否定できない時点で詰みにやよ。というかギンも渋るほどデメリットにやいにやんね？」

「え、それは？」

「そもそもこちらがギンの家に入り浸つてる時点で隠蔽性はお墨付きにやし、確か部屋も余つてたから広さもモーマンタイにや！」

「にやんにやらこのまま見捨てる方が目覚めが悪いんじやにやいかにや？」

「見捨てるて…言い方」

「今更一人二人増えたところで…ねえ？」

「そら自分らが勝手に入つてくるからやろ。…ハア、ええよ認めたる。で、さつきから蚊帳の外やつた妹さんはそれでええの？」

「気付いてたなら入れてほしかつただけど。…そんなのいいわけないでしょ、姉を傷つけた相手の世話になるなんて。でも、認めるしかないじやない私達に頼る当てなんてないし、自衛する強さもない。なら、貴方の方がいくらかマシよ」

「苦虫を噛み潰したような顔でそう答えるバイザー妹。」

「というか、どこでそんな信頼を得たんか…」

「ギンは一人っ子だからピンと来ないかもしれにやいけど、姉にとって妹はにやにより

も大事にやのよ?」

「ええそうですね。貴方は何のメリットもないのに私の妹を庇ってくれた…。それだけで十分です」

「わ、私は別に信頼はしてないわよ!? 信用はしてもいいかもだけど…」

「ほんなら二人ともウチで面倒見る、で本当にええんやな?」

「ええ、妹共々よろしくお願いいたします」

「まあ仕方なくよ、仕方なく」

無然としている妹の頭をバイザーに押しさえられながら頭を下げる二人。話がまとまってきたところで、黒歌がふと

「そう言えば妹ちゃんの名前はなんて言うにや?」

「確かに聞いてへんかったな。なら、丁度ええし簡単に各々自己紹介でもしよか?」

「はいはい! にやら私から! 皆さんご存じ! 美少女はぐれ悪魔の黒歌ちゃんにや!!」

「……」

四人の間に流れるのは少しの沈黙。ちよつと吹いた風が肌寒く感じたのはきつと季節の変わり目のせいだろう…。そうと言ったらそうなのだ(念押し)。

「にやにか言えにや!!」

「自分で美少女言うてたら世話ないニヤ…」

「真似るにゃ!」

「まあ、自称美少女は置いて…。ボクは市丸ギン…一般人や」

「逸般人(笑)の間違いじゃにゃいかにゃ?」

「オーケー、黒歌後で覚えときや。ほい、お次は?」

「では、私が。私はバイザー、知っていると認めますがはぐれです。ところで、お二人は私達の能力についてはご存じですか?」

「確か身体を変化させてへんかったつけ?それのことかいな?」

リアス達との戦いを思い出しながら指摘したギンに対して感心したように頷くバイザー。ギンの言う通りバイザーはさつききの戦いでは最初自身の足を変化させケンタウロスの様にし、そして今は妹よりも少し小さな姿をとっている。

「流石ですね市丸様。私は自身の身体を他の動物に変化させることができます。」

((様?))

バイザーの説明(途中引つかかるワードがあつたが)を他のメンバーは大人しく聞いていた。

「ただ自由に変化できるかと言えばそうではなくて、変化する動物は今まで私が食べた生物に依ります」

この様に、と声に合わせて彼女の右手がみるみる変わっていき、鳥の翼にタコの触手

が絡まったように変化した。これにはギンも黒歌も驚き、少し目を見張る。

「つて、ギンは見てたんじゃにやいの？」

「いやいやあん時は土煙とかで変わる瞬間のところはよう見えんかったんよ。つていうか複数種類同時にできるんや？」

「ええ、工場内でのケンタウロスもどきは四足類のを何種類か掛け合わせて作りました」「なるほどなあ…んで？最後は？」

「あたしよね？」

あたしはシエス。

バイザーお姉ちゃんと同じくはぐれよ。そして能力は、これ」

そう言うバイザー妹改め、シエスは両手を胸の前で祈るように組み、なにやら力を込めると手の隙間から光がこぼれた。シエスが手を開くとそこから小ぶりのウサギがぴよこんと飛び出し…

「いったあ!!」

ギンに後ろ回し蹴りを喰らわせた。

「私の能力はお姉ちゃんと少し似てて、私は自分の身体から生物を作り出すことができるの。」

おいで、とウサギを呼び手の中に収めるシエスの胸元を見るとそこには不自然な孔が

できており、黒い霧が丁度シエスの心臓の上あたりを覆っていた。

「私が作り出した生物の基になつてゐるのは私の魔力でもなく私の身体自身……。だからあまり大きなものも作れないし数も出せない。しかもお姉ちゃんと一緒に今まで口にした生物限定つて言う制約付き」

そうぼやきながら手に乗せたウサギをシエスが撫でるとウサギは黒い霧となり、シエスの空いている孔へと戻りそこにはもう孔はなくなつていた。

「ボクに蹴り喰らわせたんはノーコメントかいな？」

「ハンツ！」

「鼻で笑うんやけどこの小娘」

「私が生み出した生物は私の心理状況に大きく影響されるの……。つまりはそういうことよ。私からは以上よ」

もう話すことはない、と言うようにそっぽを向くシエスにバイザーは苦笑いしながら再度頭を下げる。

「改めまして市丸様、妹共々よろしくお願ひします。」

「さつきから言おう言おうと思うつとつたんやけど、その『様』って何なん？」

別に敬称はいらへんで？と肩をすくめながらギンが指摘するが、バイザーはいたつて当たり前のようにキョトンとした顔で

「??? いえ、これからは市丸様に仕えるのですからそれに相応ふさわしい態度でなければなりません」

「…マジ？」

「マジのマジ、本気と書いてマジと読むくらいには本気ですよ」

「ええ…」

困惑を隠せないギンは額に手を当てて天を仰いでしまった。助けを求めるようにチラリと横を見れば顔を背けプルプル震えている駄猫が見えたので軽くはたく。消去法で残った一人に視線をやるとため息をつきながらも答えてくれた。

「私たちのご主人様になったんだから？ そう」 命令すればいいじゃない」

「それ採用。バイザー、あとシエスにもいらんと思うけど言うとかわ。面倒を見る言うだけどあくまで関係は対等や。これは絶対に譲らんと、ってあからさまに悲しそうな顔をするんやないよバイザー。あと、なんでキミはそない驚いとるん？ シエス」

いや、だって…と口ごもるシエスの顔には困惑の色がありありと出ている。それほど先程のギンの言葉は彼女にとつて意外なものだったようだ。その彼女にギンは目線で以て言葉の続きを促した。

「だって、今までの男たちだったら調子に乗ってさっきの言葉は絶対に出てこないもの。『対等』だなんて…というか少なからずシモみたいな命令が出されるんだって思ってた



し……」

まあそうしたらあんたを蹴つ飛ばして姉さんを引きずってでも逃げてたけど……と続けるシエスに対し黒歌が肩に手を置きながら言う。

「ギンにそういうのを期待しちやダメにやん。そっち方面に走らにやいことにおいては信頼してもいいんだけど」

瞬間、ギンの背筋に悪寒が走り、嫌な汗が流れた。

!?!?!?

……なんなんその目えは」

「この通りこつちとしては困ったもんじやのよねえ」

黒歌の目は「野生」のそれであり、捕食者の顔をしていたのは見なかったことにしよう。

「とまあ話は逸れたけどそつちの面は気にしにやくてもいいわよ。私が保証してあげる」

「ふーん、それならいいんだけど」

まだシエスの不信感は拭えていないようだったがとりあえずは納得したつようだ。ひと段落着いた、と思いきや未だに不満の色が濃いバイザーが重い口を開く――

「力、ですか？」

「ん？」

「私の力が足りないから。貴方様に仕えるに値しないということですか?!」

「んー？何を曲解しとるしらんけどそういうつもりで言うたんやないで？」

「ならなんで！」

「ボクが嫌やからや」

はつきりと、取り付く島もなくギンは断言した。そしてさらにギンは続ける。

「そもそも、ボクは王と家臣みたいな上下関係がそない好きやないんよ。まあ一般人には従者とかは荷が重い」

自嘲するように言葉を連ねるギン。

「つまるところ、ボクにとつては後ろで傳かせられるよか隣で一緒に笑つとる方が好みっちゆうだけの話や」

そう言いながら先程の自嘲とはまた別の笑みを浮かべるギン。丁度そこに月明かりが後光の様に射し、そこだけどこかの絵画を切り抜いたような美しい光景が広がっており……

黒歌は目を抑え直視できず、

バイザーは胸を押さえ、

シエスはそっぽを向いているがその耳はどこか赤い。

「ちよっ?!皆どないしたん?!」

「ギンは自分の容姿についてもっと知った方がいいにゃん」

「…こればかりは黒歌さんに賛成ね」

「やはり私の判断は間違いないじゃなかった」

ギンの話に三者三様の反応を見せた女性陣。…しかし、約一名には逆効果であったようだ。

「市丸様、申し訳ございません。先程のお話をお聞きした上でなお伏してお願ひいたします。どうか私に貴方様に仕えさせてはいただけませんか?」

そう言いながらバイザーがとった行動はまさかのDO☆GE☆ZA。

「ちよちよちよっ!なに土下座なんかしてるん!?頭上げえや!」

「いいえ!!市丸様が良いと言うまでこの頭、上げるわけにはいきません!」

「いったい今のどこに君の琴線に触れる部分があったんや…」

今のなかなかなへタレ発言やっと思ったと思うんやけど?と肩をすくめながら呆れるギンに対し、バイザーは微動だにせず一向に頭を上げる気配はない。

「だあああ!!ええよ!根負けや、好きにしたらええ!」

その言葉に勢い良く顔を上げたバイザー。その目は少女のようにキラキラと輝いて

いた。そんな嬉しそうなバイザーにギンは、ただし!と一言断りを入れ、  
「ただし!ちゃんとは理由は聞かせてもらおうで?それと、敬語とかの言葉遣いにとにかく  
は言わへんけど…けどやな!」

せめて…せめて『様』付けだけは堪忍してくれへん?」